

2015 年度

下半期報告書



冬合宿 3 隊集合(槍ヶ岳山頂) 2015.12.30

信州大学山岳会

目次

《プレ冬合宿》・・・2

《冬合宿》・・・2

槍ヶ岳

- ・南岳西尾根
- ・横尾尾根
- ・中崎尾根

《個人山行》

2015年

10月・・・

- ・北ア 前穂高岳北尾根・明神岳主稜
- ・北ア 奥穂高岳南稜
- ・北ア 槍ヶ岳中崎尾根・西鎌尾根
- ・北ア 槍ヶ岳北鎌尾根
- ・北ア 槍ヶ岳中崎尾根・大喰岳西尾根
- ・北ア 劔岳早月尾根
- ・中ア 木曾駒ヶ岳
- ・中ア 木曾駒ヶ岳～空木岳
- ・南ア 甲斐駒ヶ岳～鋸岳

11月・・・24

- ・西上州 妙義山

12月・・・24

- ・北ア 鹿島槍ヶ岳赤岩尾根
- ・北ア 唐松岳八方尾根
- ・北ア 爺ヶ岳南尾根
- ・北ア 常念岳東南尾根
- ・北ア 霞沢岳西尾根
- ・北ア 八方尾根山スキー
- ・中ア 木曾駒ヶ岳
- ・八ヶ岳 赤岳真教寺尾根
- ・八ヶ岳 編笠山～赤岳
- ・八ヶ岳 横岳西面・石尊稜
- ・八ヶ岳 横岳西面・中山尾根・大同心

2016年

1月・・・35

- ・北ア 五竜岳遠見尾根
- ・北ア 錫杖岳
- ・北ア 潤沢岳西尾根
- ・北ア 爺ヶ岳東尾根
- ・南ア 鋸岳～甲斐駒ヶ岳
- ・八ヶ岳 ソロ縦走
- ・八ヶ岳 阿弥陀岳南稜・北稜・中央稜
- ・八ヶ岳 定着登攀

2月・・・40

- ・北ア 笠ヶ岳広サコ尾根
- ・北ア 槍ヶ岳北鎌尾根～南岳西尾根
- ・北ア 錫杖岳
- ・北ア 燕岳
- ・南ア 塩見岳～聖岳
- ・八ヶ岳 阿弥陀岳南稜・北稜・中央稜
- ・八ヶ岳 旭岳東稜

3月・・・47

- ・北ア 鹿島槍ヶ岳東尾根
- ・中ア 木曾駒ヶ岳～空木岳
- ・南ア 鳳凰三山
- ・南ア 北岳～仙丈ヶ岳ソロ縦走
- ・谷川連峰 荒沢山・大源太山

《事故報告書》

- ・五竜岳遠見尾根凍傷事故・・・53
一テムレス等ゴム手袋の性能評価・・・57
- ・仙涯嶺東尾根滑落事故・・・63

2015年

《プレ冬合宿》

日程：2015/11/28

行程（文責：L加藤穂高）

07:50 ゴンドラリフトイヴ白樺駅発

09:30 柵の森駅

10:40 柵池自然園駅

11:30 2000m 付近で雪訓

今年は暖冬により遠見尾根に雪が積もらず、合宿を遅らせても状況は思わしくないのでより北部の柵池平方面の天狗原の積雪に期待して計画を変更した。柵池高原スキー場は白樺駅から上が車乗り入れが出来ないので舗装道路を歩く。途中からスキー場の斜面を登る。スキー場で3、40センチの積雪だった。ラッセルなんて量の雪じゃなかったけど1年生は慣れない足元と重たい装備に四苦八苦で初々しい様子だった。下から作業道とゲレンデを永遠歩いてきたが時間がかかってしまい柵池自然園付近のゲレンデ隣で雪訓をさせていただいた。

雪訓は3パーティに分かれ2年生が主体で行った。雪のかさが足りなくて埋没訓練が満足に出来なかったがその分ビーコンサーチなどをしつこく教えることができた。長い時間行う雪訓、1年生のやる気集中力を続かせるためにメリハリのある指導が必要だと思った。指示は具体的に理由をつけて、その場その班のリーダー責任者を明確に、誉めるときは誉めたい。

《冬合宿》

槍ヶ岳

・南岳西尾根

後日掲載

・横尾尾根

文責：小林 記録：蒲澤

期間：12/26~31

メンバー：会4:小林, 北見 会3:蒲澤 会2:大槻, 長谷川, 山下 会1:村上, 藪内, 山口

コースタイム・概要

12月26日	
6:50	釜トンネル発
8:00	大正池
9:20	明神
10:30	徳沢
11:45	横尾
12月27日	
5:40	発
6:50	横尾尾根取り付き
9:50	P2
14:00	P3
12月28日	
5:40	発
6:40	P3-P4間コル
12:00	P4
13:00	P5手前
12月29日	
5:50	発
8:00	P7
12:00	P8
12:30	天狗のコル
12月30日	
6:10	発
7:45	稜線
10:20	槍ヶ岳肩
12:00	槍ヶ岳山頂
13:20	槍ヶ岳肩
16:20	槍平
12月31日	
7:30	発
10:00	新穂高

26日【雪】中の湯～横尾

ただの歩き。去年の春休みに歩いた時は林道や明神までの間に大きな雪崩跡があったが今年は無かった。そもそも雪が少ない。横尾の避難小屋に着いた後はガリーを偵察

(小林北見蒲澤山下)。元々の積雪と今晚中降る雪を考慮して1720mあたりからP2にある緩い斜面をあがると決めた。

27日【曇り】横尾～P3

尾根に上がる斜面の積雪は膝から太もも程度まで。特徴もない斜面なので進行方向に注意して進む。尾根に乗ってしまえばしばらく単調な登り。尾根の方向が変わり2ガリーへの急な下りを終え鞍部に出ると10mほどの岩が出てくる。右に雪の斜面がありトラロープも垂れ下がっている。ここはザイルを出してFIXで進む。その先も切れた尾根が続くため1P追加でFIX通過。しばらく歩くと5mほどの岩が出てきたため1人ずつ引き上げる。その先も切れた尾根のため40mほどFIXをはり、さらに1Pはったがこれはいらなかった。視界が広がってくるとP3である。あまり尾根を先へ進み過ぎると鞍部への下り口を見失いそうになるので注意。

28日【晴れ】P3～P5手前(2450mあたり)

この日は先発隊(北見蒲澤長谷川)を出した。先発隊は個装と最低限の団装とザイルのみにして軽量化して先に行ってもらい、本隊は荷が重くなったが1年生もそこまでの苦ではなさそうだった。P3から鞍部へ下り始めてしばらくするとすぐ20mほどのナイフリッジが出てくる。岩のリッジにきこ雪が付き足場が分からない。この日の核心だと思われる。長谷川リードでFIXをはり通過。それが終わるとすぐ40mほどの懸垂下降。支点は枯木で行った。下りきった後は急な草付斜面となりここもFIXで通過。その後も主に縦FIXを使いP4まで登れば危

険箇所は無くなり森林限界を超える手前で幕営。3ガリーから登ってきたという社会人パーティ(3人×2隊)にここで抜かれてしまった。

29日【晴れ強風】P5～天狗のコル

この日も先発隊を出した(北見蒲澤山下)。歯まで2P弱くらいの予想が雪も締まっており1Pで着いてしまった。本隊が着くと先発隊は登攀準備をしており(基部が斜面でさらにアンカーも取りにくそうなので基部より15mほど手前の小ピーク)、本隊は完全防寒をさせ待機。先発隊が1P終わると3人の社会人Pがスタカットで抜いてきた。このためさらに待機時間が延びる。本隊はツェルトで寒さを凌がせた。もう3人の社会人Pは我々の先発隊の後を追うようにコンテで登るという作戦で、彼らが登った後に本隊が通過するといった形になった。歯の通過は全部で3Pとなり核心は岩峰を巻くところと最高点に立った後の小鞍部への下りだと思われる。後者では1年生通過時のみ下から足場の指示と体を支える事をした。FIX構築時はこれらでの墜落時にそなえたものをよく考えるべきだ。歯の通過後はしばらくノーザイルで歩いたがロアーダウン(1年のみ)とP8の岩と草付の登りでFIXを張った。この日は主稜線上まであがる予定だったが強風で先の行動が不安だったのでコルの南側斜面を掘りまくってブロックも作りテントを張った。ようやく冬らしいテント設営。翌日の行動予定は天候が良かった場合、槍ヶ岳山荘までで小屋の空き状況でアタックなどを決めようというものにした。エッセン中、南岳隊の無線が一瞬入ったがその後は繋がらなかった。深夜にな

ると天候は穏やかになり小便するために外に出たら月明かりで稜線から槍まで美しすぎて見とれてしまった。結果、3人の深夜連れション大会となった。

30日【晴れ】天狗のコル〜槍ヶ岳〜槍平
絶好の天候に槍への期待が高まる。朝一で山口がアイゼンの不調を訴えてきたため（片足のみ何かはまんないっぽい）、スリングでワカンのように結び付けズレと滑落を防ぐ。主稜線への登りでは深いところで胸まであったが基本的には腰まで。小さい岩が多々出てくるが大体巻ける。ノーザイルで主稜線に登り詰め近づいてきた槍を目指す。途中で山口のアイゼンが外れる（朝とは逆足）。落ち着いて履き直させる。中岳あたりで無線が入り他SACの2隊が槍にいることを確認しFIX構築の有ることを知る。中岳の下りは梯子が出てくるため注意が必要だが、下り始めてすぐ山口のアイゼンが外れる（再び逆足）。岩角で支点を取りセルフを付けて履き直させる。この先同じことが起きても怖いのでこちらもスリングで結ばせる。視界良好のため大きな危険箇所のような場所はなく槍の肩まで詰め、小屋に入った。視界が悪く雪庇も発達していると歩けたものじゃないだろう。槍にはSACのみんなが見える。無線で情報交換し山頂で会うことに。軽く休んだ後山頂を目指した。空身であるしFIXを張ってしてくれたため短い時間で登ることができた。山頂で春寂寥を歌った後は慎重に肩まで下る。やはりこれだけ人数がいると時間がかかってしまうが上級生も多いので安心感も大きかった。山頂に着いた時間で今日中に槍平まで下れそうだと思う下山を決める。大喰岳まで登

り返し西尾根を下降。緩い尾根であるが下に石が出ていてアイゼンで歩きにくかった。早めに飛騨沢の方に下降して槍平へ。先を下り始めた南岳隊とは一時間以上の差がついたらしい。この時点で顔などに軽い凍傷を負った者を数名確認。

31日【曇り】槍平〜新穂高温泉
何十人もの人が歩き踏みしめたトレースは高速道路と化していた。サクサク進み速攻で下山。ここも去年の春休みでは恐ろしいほどのデブリがあったがそんな気配もなく、安心感はあったが皆気楽に歩きすぎであった。

総括

まず何よりも計画を無事達成できたことに素直に喜び安心している。その中で今合宿を振り返り今後のための反省・意見を並べる。

隊の足並みが揃い1年でも特別遅れるやつも出てこなかったのは感心したが、長時間行動した日が少なく、そういった時にばてる者が出てくると思う。一本中に給水、レーションを食べるのが少ないのが目立ったからだ。今回待ち時間が多かったが食べられるときに食べておかなければ長い行動時に支障がでる。特に長期では気を付け、上級生はもっと飲み食いさせるべきであった。記録とかも含め基本が大事。

先発隊を出したがまだまだ試行段階であった。どうしても待ち時間が生まれ寒さが気になるのと、情報交換で甘さが出た。上級生も下級生もザイルワークのスピードアップは必須である。ただFIXがあることで1年生でも安心して通過できるのは確かな

ので、ロープを出すことを躊躇してはならない。また、2年生のトラブルへの対応力というのを考慮した隊の並びや動きをもっと考えるべきであった。ロープ3本と団装の分け方は成功だと思う。ロープのスムーズな受け渡しは隊の離れすぎも防げ、歩荷では本隊もそこまで重くなかったし、先発もラッセルしながらの作業になる負担を考えるべきだろう。

冬合宿のルートとしては良ルートなのだろうか。今回、雪も少なく好天に恵まれたことで順調にいったが、予備を1日使っている。とくに槍の穂先のFIXは大きな時短になった。今後合宿で登る際は他の年代の記録も参考に計画して行ってほしい。ただこれだけロープを出しっぱなしなため、上級生として色々考えさせられる面白いルートであったのは間違いない。1年が最低限歩けるやつならば、上級生の力量が試される。

各係の反省

CL 小林滉平

CLとしてどうだったかというのは自己評価しにくいですが、私だけじゃなく皆の力があって無事通せたというのに間違いはない。ありがとう。

冬合宿のルートを決める際、横尾尾根は最後の最後に決めた。それは去年の春休みに自分も含め当時の3年3人で登っており、相当厳しいイメージを持っていたため、「本当に行けるのか？」という気持ちが大きかったからだ。しかし行くと決めたら自分のイメージは「どうしたら行けるだろうか？」に変わっていった。メンバーも決まり適材適所で各々が100%のパフォーマンスをして

くれたら充分可能性はあるなと思ってきたが、それだけでなく成長のための挑戦の場(特に2年生)も必要であり、これらを考えるのが楽しくもあり難しかった。

1年生はついてきてくれれば良いと思っておりよく歩いてくれた。ボロやヘマは想定しておかなければ痛い目にあう。大事なのは上級生の力量で70,80%しか出てないこともあったが、隠している場合は最大限まで放出させるのと期待が大きすぎた場合はあるもの勝負をするしかない。瞬時に実力を見抜く力があればいいが、これはそれまでにどれだけ皆と山に登るかとか話を聞くとかの蓄積で補うものだと思う。先発隊の北さんと蒲ちゃんにはだいぶ助けられた。スムーズに的確にロープを張ってくれたおかげで1年生に最大限、目を向けることができた。本隊は自分と1,2年生しかいないのでいくらロープがあっても危険箇所を目を配らなければならなく、先発隊の様子までは見られず任せっきりになった。

リスク管理と各々の成長、最高に考えさせられる合宿であった。

会計 蒲澤翔

今回の合宿ではタクシーや公共交通機関に頼らなかったため、非常に安く済ませることができた。エッセン費についても極力無駄なものを省いて節約することができた。

以下に詳細を記す。

冬合宿会計		
収入		90000
支出	食費	34414
	交通費	12386
	風呂	7200
	お年玉	36000

気象・医療 大槻泰彦

気象については、合宿前の気象変化のチェック・合宿中の天気図取り・予報という仕事は形式的にはこなしたが、まだまだ気象の知識が不足している。特に予報は、荒れる、比較的安定、といった大まかなことは言えるが、1日のうちいつごろに天気は変化するのか、風雪や気温はどの程度になるのか、といった具体的な情報は上級生全員の経験から判断するしかなく、気象係としては天気図という判断材料を作成する、という段階に留まってしまった。気象係の判断ひとつで隊の進行に大きな影響を及ぼすことを再認識して、よりよい気象判断ができるよう今後さらに勉強し、また実際に山に行って勘を養いたい。

医療については、凍傷者を複数出してしまったことが大きな反省である。注意喚起はしていたが不十分であった。末端の冷えだけでなく、衣類がずれていないかなど、細かい点にも注意すべきだった。また、12月の週末山行の様子から、個々人の体質(凍傷に罹りやすいかどうか)について情報を集め、特に注意をすべきであった。自分自身が凍傷になったことがないこともあり、1年生の立場になりきれていなかった。今後、1年生の凍傷対策に関して、十分はないということを肝に銘じていきたい。

装備 長谷川士門

大きな紛失物はモンテンのポール袋だと思う。これに関しては個々の管理が大きいので、各人の意識をしっかりと持つようにしたい。ザイルは3本でちょうど良い。先発隊が進み過ぎずかといってそこまでつまることもない本数だ。10mの捨て縄もとても役

にたったようだ。週末山行でも一年生を連れていくときには推奨できる。一番の反省はガチャに関してだと思う。個装のガチャと混ざってわかりにくい。団装の印はわかりづらく、個装のテープmpはがれている人がいるので判別が困難だった。入山前に改めて団装のマーキングの差別化をしっかりとしておくべきだった。反省としては以上である。離松組は装備係がなかなかできないが、在松の協力もあってなんとかできた。ありがとう。

エッセン 山下耕平

係りの反省としては、1日目のすき焼きの素の分量を少なくしてしまい、味が薄くなってしまった。結果、1日目から、全員のモチベーションを下げる結果となってしまった。分量把握には気を付けたい。その他のメニューにも、冬であって自由度が少ないということもあるが、バリエーションに乏しく、あまり変わり映えのしないものが多くなってしまった。もっと創意工夫を凝らしたエッセンを用意するべきであった。

個人の反省

小林滉平

ここまで気が抜けない合宿というのも初めてだった。これが4年生でCLという立場なのか山がそうさせているのかは分からないが、ルート上では常に気を配っていた印象。

記録は大事。去年の記憶は曖昧で断片的なものであったため「ここにこういうのがある」とはつきり言えなかった。横尾尾根は自分が歩いているということもあり承認も得たはずなので、そこでもう少し貢献し

たかった。
報告書と CL の反省があったため書くことがほとんどなくなってしまった。槍ヶ岳で SAC が勢揃いしたこともあり個人的には最後の冬合宿が充実したものになってよかった。

蒲澤翔

今年の冬合宿は全隊が槍ヶ岳に登頂した。横尾隊も天候に恵まれ隊全員が大きなケガ、病気もなく登頂することができた。結果だけ見れば大成功に終わった冬合宿ではあったが、反省すべき点も多く見つかった合宿だった。

まず天候が良く時間の余裕があったために、テントの設営時などに気が緩み過ぎていた。テントの固定を一部忘れたり、装備を外に放置することなどがあった。危険箇所の通過では主に FIX で確保していたが、9人という人数の多さもあり、先頭と後方での連携齟齬が起きることもあった。自分は今回の合宿では先頭で FIX を張る機会が多かったのだが、9人という大人数を効率よく安全に通過させることの難しさを感じた。ただシステムとして、荷物の軽い FIX 隊を出したり、3本のロープを交互に FIX していく方法は、今回のようなルート・メンバーでは有効だったように思う。今後も状況に合わせたルートの通過法を考えていきたい。横尾尾根の通過では通過法の判断やルート取り、支点などいろいろ考えながら上ることができて楽しかった。ただ単に足を前に動かすのではなく、先々を見据えながら登る(降る)ことが、山登りの醍醐味だと思うので、そういった山行を積み重ねていきたい。

全体として言えるのは、今回の合宿の成功は気象条件に恵まれたことが大きく、決して自分たちの実力だけで上ることができたわけではないということだ。きっと厳冬の槍ヶ岳はこんなに甘いものではないはずだ。さらなる高みを目指して2月3月の山行に取り組んでいきたい。

大槻泰彦

今回の冬合宿では、ザイルワークとその判断に関する力の無さを痛感した。具体的には、いらない所に FIX を張ってしまったり、横尾の歯通過時、最後尾で FIX 回収をする際に、1年生がインクノットを外し忘れたためにザイルが動かず、良く考えれば固定が解除されていないという単純な理由なのだが、焦って綱引きをしてしまい、寒い中先発のメンバーや1年生を待たせてしまったことだ。固定されたままだったのは核心の手前であり、実際そうしたようにザイルを自分で束ねながら固定支点まで行くことは容易であったが、言われるまでそれを実行できなかった。また1年生がミスをすることは上級生として想定しておくべきことであり、社会人パーティに追い越されている間に時間があったのだから1年生にインクノットの解除を忘れるなど一声かけるくらいのは出来たはずであった。これらの原因としては、自分のことをこなすのに自分のキャパの多くをつかってしまっていた余裕の無さ

と、3年生以上に判断力のいる難しい作業を任せてしまいある種お客さん状態になっていたことが挙げられると思う。自分にその意識はなかったが、今振り返った当時の自分の行動はそうした甘えの表れであると思う。前者はこれから経験を積んで改善していくしかないが、後者は意識の問題である。今後の山行では主体的な判断・行動ができるよう、今一度冬山に向かう姿勢を見直したい。

長谷川士門

今回の冬合宿では横尾尾根隊として槍を目指すことで、とても多くの経験ができたと思う。なによりも大きいのが数々の Fix 通過をこなしたことだろう。正直、実際に山で Fix 通過をした経験はあまりない。そのためいつまでたっても Fix を張ることに慣れないでいた状態から一皮むけたようだ。今回私が自ら張った Fix は一本だけだったが、その一本や先発隊として一緒に Fix 工作をした先輩たちの手際、後続の一年生への考慮などとても勉強になった。まだまだ経験は浅いが、これからは以前より確実に自信を持って Fix を張れると思う。ひとつ反省があるとすれば、積極性に欠けていた。経験が大事なのだと今回改めて身に染みたのもっと積極的にザイルを出し、リードをつとめていきたい。また、今回は人数が多く縦 Fix を使うことも多かった。これも実際の山で使うのは初めてである。今回の反省を生かして状況に応じて使用していきたい。また、今回一番の反省は山口の凍傷である。顔面に加えて、腰も黒くなっ

ていた。一年生の体調のケア、特に冬山においては凍傷を一番に警戒するところを、防いでやることができなかったのが非常に残念だ。十分に気にしていたつもりでいたが、結果としてなってしまったのだから、まだまだ甘かったのだろう。もっとしつこすぎるくらい確認していきたい。それもふまえて今回は特に序盤から会 2 としてのふるまいが甘かった気がする。テント設営時の仕切り方などいまさらなことを上級生に指摘されてしまった。気の緩みや責任感の足りなさが窺える。またひとつ学年をあがろうとしている今、改めて自分の役割や責任を理解して行動にうつしたい。今回は天狗のコルでとまった日以外は実に穏やかで良い天候だった。天気にも恵まれたおかげでこの合宿が無事に終わられたということは言うまでもない。慢心はせずに、精進していきたい。しかし、槍の山頂に 3 隊が集結できたことは本当に嬉しかった。こんなに良い合宿はないと思った。この感動を忘れずに、また来年も再来年もよい合宿をしたい。

山下耕平

個人の反省としては、自ら横尾尾根に行きたいと志願したにもかかわらず、あまり隊全体の役には立てなかったことがある。上級生という立場では初めての冬の合宿であったが、要所要所で 3・4 年生に頼り切ってしまった。反省会でもでたが、もっと考えることができればもっと動けたと思う。完全な経験不足の結果である。2 年生としての立場を自覚し、上級生としてきちんと頼れる人間にならなければならないと感じた。そのほかにも、上級生として気が緩ん

でいたせいか、生活技術が1年の頃に比べて自分でもわかるくらい落ちていたのは、意識が足りないと感じた。自分のふがいなさ、頼りなさを感じた合宿であった。

村上友理

藪内鷹佑

この冬合宿はプレ冬合宿を経験し、何度かの週末山行で経験を積んで、冬合宿に臨んだ。

それまでの合宿や週末山行で培われてきたものを試す時であり、それらの場で注意されたことや足りない部分などをどれほど克服できたのかもこの冬合宿で現れる。未熟である部分は多いが、この冬合宿において、横尾尾根に行くことができるのは大変うれしく思う。

一日目。ただ、上高地の林道を歩くだけである。今年は積雪が少ないのもありラッセルなどなく順調に進んだ。ただ、この日にアスファルトパートで土踏まずの部分を靴擦れさせてしまった。今まで冬季山行において、靴連れすらしなかったため、この日を機会に注意したい。2日目、三のガリーが危険の判断のため、P3の手前から取りついた。取りついてからは少しラッセルになったが、雪の下にすぐ笹が隠れたりなどで滑りやすかった。そのため、手こずってしまったり、トレースを潰してしまったりなどしてしまい、少々遅れがちになってしまった。これは蹴り込み不足と体力不足によるものである。これからの山行下界での生活において、鍛えていく必要がある。P3の登りにおいては危険箇所がいくつか出てきており、そのため、フィックスをはった。

これまでの山行であまりフィックスを張ってあるような場所の経験がなく、ロープを使った時のイメージが少しいてよかったですと感じる。3日目、この日の予定はP5までであったが危険箇所も多かった。そんな危険箇所では非常に怖いと思い、少し半泣きになってしまった。また、この日は先発と後発で別れたが、懸垂も出たりもし、ロープを扱うことも多く、ロープがたたむのが遅かったりした。オーバー手を着けた状態でもロープをしっかり扱えるようにしたい。4日目になり、さすがに疲れも出てきており、歩荷するのが苦痛になる。歩荷力もまだ全然足りないようだ。ただ、天候に恵まれているのは本当に幸運である。また、この日は核心部である横尾の歯の通過があった。フィックスをバンバンに張り通過した。非常に緊張するような場面が続いた。ここを超えると風が強く、上級生に支えられるような場面があった。経験不足である。ここで学んだ経験を生かしていきたい。5日目は、稜線に上がり、槍まで行った。稜線に上がるまでに私はかなり消耗してしまい、辛かった。途中、過呼吸状態にもなってしまい、苦しい場面が続く。槍にも無事に登ることができ、山頂で見た景色は本当に美しかった。下山まででは、バテテ、遅れてしまい、団装をばらすこととなってしまった。合宿中で一番悔しかったことである。まだまだ、実力、経験も不足しておりこの合宿で学んだことを次の山行に生かしていきたい。

山口耕平

今回の冬合宿は天候に恵まれていた。雪

はほとんど降らず、槍アタックの日は風も弱く、快晴であった。しかし、私にとってこの合宿は、冬山の恐ろしさと自分の意識の甘さを思い知らされる山行であった。一番に反省すべきは、槍アタックの日、アイゼンが何度も外れてしまったことである。この原因としては、アイゼンの故障、調整不足、そしてそもそも靴とアイゼンが合っていないことが挙げられる。靴とアイゼンが合っていないことは、出発前に絶対に違和感を持っていなければならなかったことである。それに気づけなかったのは、自分の意識の甘さ、「まあ大丈夫だろう」というなあなあな気持ちの表れである。アイゼンは密接に命に関わる道具である。今後、道具の点検には妥協せず、細心の注意を払って取り組む。アイゼンの調整不足については、これも妥協してはいけないことを妥協した結果である。朝、アイゼンの故障を応急処置するために隊を待たせたことで焦りが生まれ、アイゼンが外れないかの点検が疎かになっていた。結果、危険箇所アイゼンが外れ、自分のみならず、隊の他のメンバーをも危険箇所待たせることとなってしまった。焦って準備がいい加減なままに妥協すると、山では自分や他人の命を危険に晒すことになってしまう。準備段階で妥協を決してせず、その上で早さを追求していく。また、歩行中にもアイゼンに気を配り、違和感を持ったら隊を止めて直すようにする。アイゼンの故障については、イレギュラーなことが起こっているにも関わらず、当然のように出発してしまったことが反省である。先ほどの調整不足と通じる事でもあるが、自分が「外れない」と確信できるまでは出発すべきではなかつ

た。

もう一つの反省点として、寒さに対する認識の甘さが挙げられる。衣類の調整は面倒に思わずこまめに行い、衣類調整の必要を感じた場合、ためらわずに申し出るようにする。また、表情筋を動かす、手足の指を動かすといった凍傷予防を意識的に行うようにする。

今回の冬合宿は、自分の命を自分で守ることさえ疎かになり、上級生の方々に登らせて頂いたという状況だった。次の冬合宿では自分が上級生である。今度は自分の力で登ったと思いたいし、その上人を連れて行けるようにならなければならない。自覚を持って、自分の責任の下で行動することを常に意識したい。

・中崎尾根

日程：12/27~12/31

メンバー：CL 片野、SL 内田、植野、渡部、城田、稲垣、前田、小山、会原

記録：

12/27

7：45 新穂高

14：00 T.S (1816mピーク手前)

12/28

4：30 起床

6：00 出発

9：30 尾根分岐 (1960m)

13：00 奥丸山

14：45 B.C(2350m)

12/29

沈殿 (曜子体調不良)

12/30
4:30 起床
5:45 出発
7:30 千丈乗越
8:45 槍の肩
10:20 槍ヶ岳山頂
13:00 槍の肩
14:45 B.C

12/31
4:30 起床
6:00 B.C 発
6:40 夏道分岐点
7:55 槍平
8:55 滝谷避難小屋
10:00 白出沢
10:45 穂高山荘
11:30 新穂高

反省：

CL 片野

天候のよい、雪の少ない、快適な合宿。終わってしまえば、そういうことになるのだろうか。現在総勢 25 名の信州大学山岳会で全員が槍ヶ岳を目指すため 3 パーティーにわけて今回の合宿は行われた。その 1 つの中崎隊のリーダーになった。初めての合宿リーダー。反対もあったが自分でやりたいと主張した。自分自身、絶対的な力がないため、今回の中崎隊は和を意識した。しかしながら反省点としては、隊として和を重んじるあまり自分自身の意見が弱かったのではないかと感じた。リーダー部員の様々な意見をとり入れるのはもちろんではあるが、最終的な決定はリーダーである自分がするという、責任感が薄かったの

ではないか。今回曜子が熱をだし山頂に連れていけなかった。一緒にいかないという決断をする際も、情に流されそうになったりとリーダーとしての弱さが顕著に表れてしまった。隊としての方針、優先順位を明確に決めること、これがリーダーとしての仕事の一つである。当たり前のことを当たり前にできること、未熟な自分は痛感した。今回の中崎隊メンバーは自分も含め決して強いやつらばかりじゃなかった。それでも冬の槍ヶ岳を目指せるメンバーであった。各々が個人として自立しているわけじゃなかったが、メンバーが全員人任せのパーティーではなかった。自分ができることは何かを考え成長を感じながら行動していた。お互い助け合うこと、自立すること、どちらも大事で山岳会を組織する上で最重要であろう。

また今回は 9 名のうち 3 名が女子部員という隊でもあった。結果、男子部員の負担が大きくなったことは言うまでもない。一緒に山に登れること、山岳会に籍をおけること、謙虚に感謝して、3 人にとって自分自身なにができるのかを考える機会になったのではないか。もらった分、返していこう。男子部員のみなさん本当にありがとう。

全隊が槍ヶ岳の山頂に集まって肩を組み春寂寥をうたっているとき、月並みないかただが感動した。このメンバーで槍の山頂にたつことはきっと二度とないだろう。文字通り、今の山岳会でしかできないことをしたのだ。全隊無事に下山し安堵した。みなさん、お疲れ様でした。

SL 内田

比較的各学年の主張が弱いメンバーが集ま

った中崎尾根隊。このメンバーで北アルプスの名峰槍ヶ岳に登るのには他の隊以上に大きな意味があると思い、絶対に連れて行くと思気込み臨んだ冬合宿。SLだからCLの補助といった感じではなく、二人でSLの気持ち。例年に比べて雪も少なく、思い通り進むことが出来た。決断に迷ったのが、曜子の体調不良。B.C まではたどり着いたものの病人一人を置いてアタックするか、沈殿で回復を待つべきか、付き人を置きアタックするか色んな選択肢が浮かんだ。はっきり言って100点の解答なんてひとそれぞれ違うとは思。だが、こういった状況を見据えて優先順位をつけておくことは下でも出来たはずである。私たちがとった行動は1日沈殿で回復を待ち、その次の日に病人をB.Cに残し、残りのメンバーでアタック。結果から言えば、本隊は山頂を踏むことが出来、曜子の容体は悪化せず良かったのかもしれない。だが、もし容体が悪化しすぐ病人に連れて行かない状況になっていたらなどリスクはあった。こういった時の隊の意思決定をするのがCLとSL。役職の責任の重さを身をもって知ることが出来た。来年は最上級生、まだまだ成長しなければ。

会2

植野

昨年は病欠した為、今回が初の冬合宿となった。今回の合宿について、まず、最後まで大きな事故やヒヤリとする場面も無く歩きとおせたのは、メンバー全員が意識して歩いた結果だと思。天候にも恵まれ、良い山行になったと思。

反省としては、隊を動かす意識がもっと

必要だった事、これに尽きると思。週末山行でも反省として挙がったが生かしきれなかった。例えば、二日目のルーフアイのミスはおかしいと感じたその時点で先頭に伝えるべきであった。また、隊の雰囲気も盛り上げきれず、全体的に自分が隊を引っ張るという意識が足りなかった。今回は天候に助けられたが、天候がもし、悪化した場合に同じような状態ならば非常に頼りなく、不安のある山行になりかねず、危険である。今後の山行で更に意識していきたい。

装備係としては、一部、物の所在が曖昧になった時があったのが反省である。複数のテントを張る場合、物が錯綜しやすい為、気を付ける必要がある。当たり前であるが、隊の全員も意識すべきだ。また、白ガス、ツェルト等の細かいものをまとめる袋は標準で持っていくのは有効であると思。

城田

今回の冬合宿の反省は、出発前からはじまる。出発の前日から風邪を引いてしまい、体調が優れないまま入山することになってしまった。昨年冬合宿に参加できなかったため、今年こそはという私的な感情で参加を決定してしまったのが大きな過ちだった。山で風邪を治せる可能性など存在するわけがない。それにもかかわらず、冬山をなめた甘い判断で入山してしまい、後に隊の計画を崩してしまうほどの迷惑をかけることになった。体調不良や病気、怪我は自分一人だけの問題ではない。自分の行動が隊の計画・行動に大きな影響を及ぼし、登頂という可能性を失くしてしまう。今回はその典型的な悪い示しとなってしまった。体調

に関してはメンバーに周知してもらう必要がある。独断で決めずに、自分からこまめに相談すべきであった。リスクの高い冬山においては、特にこのことを遵守しなくてはならない。

今回大きな反省の二つ目は、上級生としての意識の欠如にある。正直自分のことが精一杯で、一年生まで見きれていなかったことが多々あった。私は冬山の経験が少なく、さらに体力も乏しいため、上級生としてできることも限られている。しかしその中でも自分が遂げられる役割がもっとあったように思う。テント設営時や出発時の指示など、隊の運営により積極的になるべきであったと反省している。また、2日目に稲垣に先頭でラッセルをしてもらった際、ルーファイミス指摘できなかった。右から尾根に乗るものと勘違いしていたことが原因だ。今回は天気が好条件であり、さらに上りであったにもかかわらず、このような基本的なミスをしてしまった。吹雪いてホワイトアウトしているときのことを考えたら恐ろしい。こまめに現在地を把握し、ルートファインディング技術を高めていく必要性を身に染みて感じた瞬間だった。

今回の冬合宿は自分の不調により、当初の計画とは大幅にずれて実動3日間となってしまった。これも全ては自分が引き金である。体調管理などという基本的なことは言うまでもなく、冬山に対する技術、体力、知識や判断、そして上級生としての自覚や経験を高めていかななくてはならない。そういった意識を変えていかなければ、冬山など登る資格はない。

渡部

【個人】

「できる1年」と「使える上級生」の違いは何なのだろうか。少なくとも

・隊を動かせることが挙げられる。ルーファイ、ラッセル、指示出し、FIX 工作、リード、雰囲気づくり…等々。方法は様々で、自分はどれ1つとして満足にできなかった。結果は、去年の冬合宿と同じ「登頂成功」なのだが、受け取り方が全く異なる内容のクライ冬合宿となった。

技術も気持ちすらも“ムラ”があった。それら場면을刻みつけ、今後の山行で改善していくしかない。

【係(気象,会計)】

気象係としては、所詮素人予報なので100%の精度よりも、数%でも天気図より予想される「起こり得る悪天(降雪,強風,ガス)」があれば、「その傾向(悪化か回復か)」「その時間帯(午前か午後か)」を伝え、“行動にどう反映させるか”を提案する姿勢を目指した。限定の予報の補助資料として、日本山岳会のメールを利用した。「日本山岳会」で検索すれば見つかる。会計は割愛。

会1

稲垣

プレ冬から始まった冬山登山は12月の週末山行も今回の冬合宿も好天に恵まれた。27日に入山し31日に下山してくるまでの間、わずかに雪が舞うこともあったがおおむね晴れていた。27・28日は槍ヶ岳へのアタックにむけ奥丸山を目指して樹林帯を進んだ。とりつきの登りを過ぎてからは全員で交代をしながらのラッセルを行った。前述のように12月は天気が良く今回は貴重

なラッセルの経験ができたと思う。28日の途中で内田さんが率先してラッセルをして、基本的な型を示してくださった。斜度の小さなところでは大股で、斜度の大きな斜面では膝を使って前の雪をつぶしその上に乗る。本人もおっしゃっていたがひたすらラッセルをして経験をつみ体で覚えていくしかない。28日の朝の行動では1P目のヘッテン行動で先頭に行く私がルートを誤り迷い尾根に少し入ってしまった。先輩方がすぐに気づき修正してくださったが、コンパスを見れば十分に対応できたはずのミスだった。春には会2として後輩を連れていくことになる身でありながら、まだまだ連れて行ってもらっているだけだと実感した。技術や知識、経験が足りないのは当たり前なのだがこうした意識次第で変えられるところから改善を行っていきたい。29日は風邪気味だったよう子さんの症状が悪化し槍アタックを延期し沈殿することになった。翌朝も熱が下がらず結果その他メンバーで槍とT.S.とのピストンを行うこととした。槍ヶ岳の登攀は緊張感があり、特に下りは時間がかかった。山頂での全隊の集合は今回の合宿で一番の思い出だ。31日にT.S.から槍平に下り新穂高までをつらつらと歩き今回の合宿の全行程が終了した。

冬合宿を通してより厳しい条件となるであろう2、3月の山行と来春会2になることへの意識が高まった。今の自分の一番の課題は足置きへの認識の改善であり、自分でも認識していたが重ねて先輩方からも指摘をいただいた。美しい山を見るためこれから春までにできることを一つ一つ積み重ねていきたい。

小山

まず初めに今回の冬合宿で槍ヶ岳に登れたことはとても良い思い出になりました。槍ヶ岳の山頂でほかの隊と合流でき、春寂寥を歌えたことができてとてもうれしかったです。ただ冬の槍ヶ岳に登ったとはいってもそれは新人合宿の時と同様に上級生が危険箇所を注意してくれ、フィックスロープを張ってくれ、天候を考え、隊の様子をみて、様々なことをやってくれたことで私はたのしく充実した冬合宿を過ごせました。わたしのいた中崎隊は尾根を末端からつめるというルートでした。初日の尾根の乗り上げまでの道は急で足場が悪くバランスをとるのがむずかしかったです。前の人を通ったトレースでも自分でしっかり確かめてから体重をかけるようにしたいです。歩行技術はもっと向上させなければと思った。奥丸山まではトレースがなく隊全員でラッセルを回しながら進んだ。週末山行でもラッセルをしてこなかった私はまだまだ経験不足だった。先輩にも言われたとおりラッセルには型があり経験を積むしかないという。これからはより長時間、長距離をラッセルできるように考えながらラッセルしたい。あと、読図に関して上級生に任せっきりにしてしまったことは反省です。尾根上のルートなので迷うこともないと思いあまり地図をみななかった。しかし、読図の意味はそういったことだけではなく現地の確認、今後の地形の把握といった大事なことであるので地図を見るということは習慣づけなければと思った。生活に関してはテント内での物の紛失が多かった。物は出したらしまうことをいちいちやらなければ簡単になくなってしまう。

特にエッセン中は物がなくなりやすいので気を付けたい。

全体的には基本を疎かにして、そのことを上級生に怒られることがあった。そういったことで怒られるのはそろそろダサい。そんなことで上級生に怒らせたくない。基礎基本を今一度見直して、強い基盤を作りたいと思います。

前田

冬合宿を通して出た反省点、学んだことは多くある。行動面と生活面に分けて反省を書いていく。

・行動面

行動の多くは、ラッセルが占めた。ラッセルは大体が膝前後くらいで、決して深くはなかった。だが、上級生に比べてあまり長い距離をラッセルできず、まだまだ体力向上が必要だと感じた。それと伴い、ラッセル時の歩き方の技術も必要である。雪の深さによるラッセルの仕方の違い、浅いときは股を横に大きく開いてから足を下ろす、深いときは膝で雪を固めてから蹴り込むなどの、深さに応じた効率の良い歩き方が、まだなっていないと感じた。これらのことは、山行を重ねていく中で意識しながら行い、徐々に徐々に身につけていき、距離を伸ばせるようにしていかなければならない。

槍のアタックでは、アイゼンワークが重要となった。アイゼンの前爪を岩に引っ掛ける動作は、今までの週末山行やアイゼン岩トレで向上しているとは感じたが、徹底できていなかった。また、クライムダウンでは自分の足場が見えにくいために前爪をひっかけることに自信が持てず、何度も確認、時間がかかってしまった。これらは徹

底できていないと危険につながるため、これからの山行、岩トレで、正確な足置き、爪で乗っかる感覚に自信を持てるようにする必要がある。

自分にとって苦手なのは、下りである。片足で乗るバランス力や体幹が、周りに比べて不十分だと感じる。それ故にバランスを崩すことが多く、それを立て直すために力を使い、隊から少しばかり遅れてしまうことが幾度かあった。バランスや体幹のトレーニングは、下界で大いにできる。すぐには身につけられるものではないので、長期間かけ、しっかりトレーニングしていこうと思う。

・生活面

生活面での反省としてはまず、個装や食器類、火器などがどこにあるかという物の把握があまりできていなかった。テント内が散らかっていたために、物を見失い、探すことも多かった。これでは、エッセンや準備などでスムーズな作業ができず、お互いにとって気持ちよくない。個装であればまとめることで、食器、火器類であればそれぞれが担当し管理することで防げることである。物の把握、管理をなお一層意識して、物をなくすことがないようにしなければならない。

エッセン中では朝にしても夕にしても、もっと周りを見る必要があると感じた。朝なら周りの人がどのくらい準備が済んでいるのか見て、夕なら位置の関係上どの時効率が良いのかを見て、鍋持ちをする必要があった。これもスムーズに早く行うために欠かせない。もっとも、朝、靴を履いてスパッツをつける準備の速さも上級生と比べたら遅く、まだまだ向上すべき課題である。

今回の合宿ではこれらのことと同時に、隊を盛り上げる重要さも知った。ラッセルは先頭を交代しながら隊全体で登っていく。その際に掛け声や歌などで隊を盛り上げ、モチベーションを上げていく大切さを感じた。また、今回の合宿は大体晴れていて条件が良かったが、常にこうとは限らない。これまでの冬の山行では良い天気しか経験していないが、この先悪天候となることはいくらでもありうる。ラッセル、アイゼン歩き、下りなど条件がいい中でもこの状況である。条件が悪くなればさらにし難くなる。この先の山行で悪天候を経験し、徹底して技術を身に着ける必要がある。

《個人山行》

◎10月

北アルプス 前穂北尾根・明神主稜

日程：2015.10.10~12

メンバー：L内田(会3)山下(会2)松橋(会2)

Day1

5:50 上高地 BT

6:30 明神

7:30 中畠新道入口

10:00 奥又白池

12:15 5.6の科尔

Day2

雨、雪のため沈殿

Day3

5:00 起床

7:00 5.6の科尔発

8:00 涸沢

9:15 横尾

11:00 上高地

始発のバスで上高地に向かう。3連休であってさすがに人は多く、駐車場は早朝にかかわらずかなり埋まっていた。上高地に降り立つとまず3人は寒いと口をそろえた。中畠新道までは慣れた道。だらだら3人で歩く。中畠新道で少し登り、体はこれまでの行程で温まり、陽も出てきて気温も上がったせいか、いつの間にか汗が流れていた。パノラマ新道分岐で一本。止まると体は冷えるが山の中腹部では紅葉がまだ美しくなんだか清々しい。水場は枯渇寸前。そこからは奥又方面に。登山道はとにかく勾配もきつく時には木をつかみながら登る。会2の2人は息が上がっている。あまり気に留めず進める(笑)奥又は人は誰もいなく快適。この時期になっても虫がそこらに飛んでいた。水場は30mくらい下ったところにちょろちょろと出ていた。3連休でも出ているのが分かったのは有益な情報かと。そこから5.6の科尔へ。サマテンの時期に生い茂っていた草たちは枯れていたため道は明瞭。とても歩きやすい。トラバースを500mくらいしてからガレ沢に下り、ガレ沢を登ると5.6の科尔。このガレ沢は250mUPくらいで案外悪い。ガレ沢を詰めたところにか所悪いトラバースがあるので注意。5.6の科尔は3~4人テント1張り、2~3人テントが2張り、2張りが限界。快適に過ごせそうな場所は1張り分。早く行くべし。2日めは予報通り朝から雨。雨も雪に変わり、夕方にはうっすら積もっていた。沈殿はとにかく暇。クイズ大会は意外に盛り上がった。朝起きると、外は一面真っ白。昨夜のガスも夜中の強風で抜け、真っ青の空と穂高の白

がいいコントラストを生んでいた。朝6時ごろには陽も出て暖かくなると思ったが、風が強い。本当冬に似た雰囲気だ。撤収は迅速に。できることはテント内で済ませ、テントをさっさと撤収。

涸沢経由でエスケープ。秋の涸沢は5.6の科尔のような厳しさはなく、登山者でにぎわっていた。横尾まで70分、横尾から上高地までは1時間半と上級生ペースで下山。総括としてはこの時期の穂高は恐ろしい。判断は慎重に。

北アルプス 奥穂南稜

日程：2015/10/11-12

メンバー：L 渡部(会2) 菊田(会3) 植野(会2)

コース＝タイム

11日 岳沢入り

16:25 上高地発(渡部,植野)～18:10 岳沢小屋

18:10 上高地(菊田)～19:40 岳沢小屋(=B.C.)

12日

5:25 B.C. 出発

～5:40 左支稜末端…※1

～6:35 中央ルンゼ(小滝先)(懸垂20m)…※2

～7:00 三段の小滝先一本

～7:30-8:10 右支稜 2p(20m/15m)…※3

～9:00-9:35 トリコニー I 峰基部(ch:30m)

～9:35-10:20 一峰トラバース(25m)…※4

～10:20-11:40 II 峰トラバース-小ギャップ-2,3のナイフリッジ-ギャップ(懸垂5m)

～12:00 南稜の頭

～13:25 紀美子平

～14:45-15:20 B.C.

～16:55 上高地 BT

特記事項

※1 南稜取付き

2015.10 中旬の段階では、雪渓はシュルンドというよりは、それ自体がスノーブリッジになっていました。出合いは左支稜まで岩場伝いに歩ける程、融雪が進んでいました

※2 左支稜～中央ルンゼ

藪を一通り漕ぎ終わった後、少しルーファイをすると中央ルンゼの小滝先に降りる下降点が見つかりました。(アンカー：木

※3 2p 登攀

1 ピッチ目の開始点にはボルトが1つ打ってありました。アンカーは木、ピナクルでとりました。

※4 I 峰

直登すると、南稜で一番難しそうに思われます。トップアウトした先はすぐに傾斜が緩くなっています。ボルトは…忘れてしまいました、すみません。トラバース後、リッジ上をへつり、ピナクルでアンカーをとりました。

感想

・秋の北アルプス

10/10 土曜の降雪により、2600m 付近から岩の割れ目が凍り付き、新雪が見られ始めました。上部の岩稜、急なクライムダウン箇所ではより慎重な足置きが求められた。稜上付近での積雪は5cm 強くらいでしょうか。この日の天候は風強く、ガスと、決してよいものではありませんでした。さらに降雪があったら吹雪となり、タイミングによっては安全な登山ができた確証はありませんでした。秋の北アルプスは、わかっていたことではありますが、非常にグレーゾーンでした。

・時間管理

登山体系上では、取付き～南稜の頭が3～4h

となっていました。僕らは 6h20m かかってしまいました。①左支稜の藪漕ぎ、懸垂②登攀全般(ルーファイ、登り、回収)の2つが、主要因と思われます。②に意識的になることで、次回に生かしたいと思います。

北アルプス 中崎尾根・西鎌尾根

日程：2015/10/17～18

メンバー：L加藤穂(会3)丸藤、小林(会4)植野、渡部(会2)

行程：

1日目

06:50 新穂高発

08:30 白出沢分岐

10:30 槍平

11:50 奥丸山北で中崎尾根に乗る

14:15 千丈沢乗越

16:40 硫黄乗越

17:15 樅沢岳

18:20 双六小屋

冬合宿の偵察のため山行を計画した。まず槍平までの単調な道、白出沢を過ぎてから先は冬は登山道ではなく川原を歩いた方が良さそうだ。実際昨年度冬にこの辺りを歩いた先輩方も川原を永遠下ってきたらしい。槍平からは中崎尾根に乗るため細い尾根に行く。下部も序盤から急登で切れていて冬はザイルが必要になりそうだ。また下る際間違え尾根になりそうなものも多く赤布を要所要所に付けてきた。中崎尾根に乗ってからは広い尾根で何処でもテン場にできそうだ。中崎尾根については千丈沢乗越に上がるところ、夏道通しだと斜面のトラバースになってしまうので乗越までなるべく直登したいと思った。ここは尾根上に行く場合は岩の間を縫って所々確保が必要だと予

想される。ここから先西鎌尾根は、夏道はほとんど尾根上ではなくトラバース道になっているので冬は使えなさそうだがしっかりと鎖が付いている所もある。この尾根なら雪がたまることも無さそうだし鎖が埋まっていなければフィックスとして使えそうだった。鎖のないトラバース道については尾根上が進めるかどうか偵察してみた。ザイルでの確保が必要そうな登り下りもあるが絶望的な壁はなく進めそうだった。テン場については樅沢岳に近づくほど増えてくる印象なので、反対に千丈沢乗越で停まらず西鎌にはいると前半なかなかテン場がないので注意が必要だと思った。15時半ごろいきなり雹が降ってきた。最初は小さかったがどんどん大きくなり親指の爪ほどの大きさになる頃には痛すぎてヘルメットを被るほどだった。18時過ぎ暗くなるまで行動し双六小屋に到着した。

2日目

05:50 双六小屋発

06:50 弓折岳分岐

07:30 鏡平

15:40 弓折尾根末端で一般道に復帰

17:30 新穂高

双六小屋から出発し樅沢岳から伸びる尾根に乗り遠くから確認。樅沢岳直下までは広い尾根だが樅沢岳の直下は立った岩壁が見えていて不確定な要素が多いままになってしまった。今回は弓折岳までは行かず夏道どおしにトラバース道を下る。冬に歩くであろう弓折岳への直登については障害物になるものはなく快適に高度を稼げそうだった。しかしただ広い尾根なので雪崩に気をつける必要がありそう。鏡平まで下りその先は弓折尾根を忠実に藪のなかを下った。

まず鏡平から南下し 2303 に行きそこから急降下していく。しかし 2303 に立ってみると見た目だけでは弓折尾根の方向は見分けずらくここはしっかりコンパスを合わせ下り始める必要がある。一応正解の方向に赤布を付けてきた。藪をかき分け下り 2000 あたりで岩壁が出てくる。東にも西にも巻くことが出来ず直登を求められることになりそうだ。またこの弓折尾根は末端まで下りきったあとが大変で、左俣谷を渡渉して対岸の林道に上がろうにも崖になってい上がれないし、そもそも林道が雪に埋まっていそうで当てにならない。ここは弓折岳を下りきった後も南西に進み続け秩父小沢、秩父沢を渡る必要がありそうだ。

弓折尾根に関しては末端取りつきまでのルート取りが難しくなりそう。それと槍まで行くためには相当の日数と装備が必要になりそうだ。

北アルプス 北鎌尾根

日程：平成 27 年 10 月 17 日～19 日

メンバー：L 菊田(会 3)、荒川(会 4)、長谷川(会 2)、山下(会 2)

ルート：上高地～槍沢～槍ヶ岳～北鎌独標～北鎌のコル～Ⅱ峰～湯又山荘～高瀬ダム

【1 日目】

7:30 上高地

9:00 横尾

12:30 大曲

15:00 槍ノ肩

北鎌、冬に向けての偵察山行。槍ヶ岳から北鎌末端へ下っていき、途中でデポ用品を下すため諸々の装備を詰め込んだ一斗缶

をザックに押しこめ、上高地を出発した。1 日目はノーマルルートを淡々と槍ノ肩を目指し登っていく。一般道といえども一斗缶入りのザックは 40kg 近くにあり、思った以上にペースが上がらない。この日のうちに穂先を越えて北鎌平に行く予定だったが、時間的余裕がなく槍ノ肩に宿泊することを決める。肩手前のつづら折りにほうっすら雪が積もっており、穂先以降の行程に不安を覚える。

【2 日目】

5:00 槍ノ肩

5:30 槍ヶ岳

7:00 北鎌平

8:55 P14 付近

10:40 P12

12:30 独標

16:45 北鎌のコル

夜明けとともに槍の肩を出発する。槍の山頂から北鎌側に下降するのが第一の核心で、雪がついていたのでロープを出して懸垂下降で山頂直下の傾斜な急な場所を下る。北鎌平に降りてそこから先はしばらく雪がついていたので、しばらくアイゼンを装着して歩いた。独標までは、冬の偵察ということもあり、リッジ上を進む。くわえてデポ用品の重みもあり、ペースが思いのほか上がらず独標につくまで時間を使ってしまった。独標でデポ用品の半分を担ぎ下ろす。水も不足気味だったので、積もった雪をポリタンやナルゲンに詰めて飲み水を確保した。夏のルートでは独標は天井沢側に巻いて越えていくが、偵察ということもあり独標も稜線上を下っていく。途中二回、懸垂

をする箇所があり、一回目の懸垂はほぼ空中懸垂になるところがあり、荷物が重かったので緊張した。2 回目の懸垂は独標の下部だったが、降りる場所が悪くやたらスタックして大変だった。独標から降りたところのすぐにある 2790m ピークに残りのデポを残置し、今日の宿泊地である北鎌のコルにむかう。北鎌のコルにつく頃には辺りは薄暗くなっていて、ほぼ 12 時間行動ということもあり結構疲労がたまっていた。

【3 日目】

5:00 北鎌のコル
6:50 P6 トラバース
8:30 P4
12:10 北鎌末端
14:50 晴嵐荘
17:00 高瀬ダム

この日の行程は北鎌のコルから高瀬ダムまでだった。正直、北鎌下降で最もつらかった日が 3 日目だった。北鎌のコルから P6 に上がると、途端に踏み跡がなくなった。P5 を天井沢の方に撒くようにしていると、岩が崩れたところもとないトラバースがあり、緊張しながら通過した。その後踏み跡がない尾根上を、ササをかき分け進んでいくと、どうにも前に進めない急な斜面になったのでロープを出して懸垂した。50m ほど、割とロープを出し切って懸垂すると、P4 に続く比較的歩きやすそうな場所に出た。P4 から P3 までも踏み跡不明瞭で岩場が脆い嫌な道が続いた。P3 からは樹林帯に入り、サブがないすっきりした道を北鎌尾根末端目指して下っていく。尾根から沢へ続く急な斜面を降りていく途中でロー

プを出し懸垂した。北鎌沢まで降りると、平たんな場所を歩けるということでメンバーのテンションが上がった。しかし北鎌沢から晴嵐荘までの沢沿いの道は途中何度か渡渉を強いられる場面があり、靴を濡らしながら沢をずっと降りて行った。晴嵐荘を過ぎるとあとは整備された道だったので、タクシーに間に合うようにせつせと歩いた。

北アルプス 中崎尾根・大喰岳西尾根

日程：2015/10/17~18

メンバー：L 内田祥平（会 3）片野亜紀（会 4）北見元（会 4）大槻泰彦（会 2）河村将人（会 2）城田曜子（会 2）

今山行は今冬の冬合宿の偵察山行である。主に幕営地や危険個所を無積雪期である 10 月に偵察するのが目的である。ルートは新穂高から中崎尾根末端に乗り、のらりくらしと長い尾根を登り、槍ヶ岳を登頂し飛騨沢乗越から一般道で新穂高に戻った。一日目、新穂高から入山し中崎尾根に乗り、尾根の分岐点などに赤テープを張っていった。予定では槍ヶ岳山荘まで行くつもりであったが、思いのほか偵察に時間がかかったのと尾根が長く、冬合宿でも B.C になるであろう 2300m の台地に T.S。2 日目は千丈沢乗越など岩場が出る箇所の偵察が中心。冬ならここは巻くべきだとかここは直登できそうだと話しながら、槍ヶ岳山荘に。さすがに登りなれている槍ヶ岳はカット。ここで大槻に高山病の症状が出る。本来の予定では大喰岳から西に伸びる尾根を下るつもりであったが登山返しが厳しそうであったため、大槻、河村を飛騨沢乗越で待機させ残りのメンバーで大喰岳まで登り軽く偵

察。その後、二人と合流し、一般登山道より下山した。冬合宿が楽しみだ。

北アルプス 劔岳早月尾根

日程：2015/10/24~25

メンバー：会 4) 片野 小林 会 3) 加藤(穂)
会 2) L 大槻 長谷川

行程：10/24 松本=馬場島~早月小屋

10/25 早月小屋⇄劔岳~馬場島

記録：

10/23

伊那組(加藤除く 4 人)は松本に前泊

10/24

3:30 松本発 7:20 馬場島出発 9:45 1600m 付近
12:10 早月小屋

白馬のコンビニで長野組加藤と合流し馬場島へ。馬場島からのんびりと登って行く。松尾平、1350m 付近、1600m 付近等に冬のテン場を見定めた。早々と早月小屋に着いたため遊んだりおやつを食べているとガスがかかったのでテントに入った。予報通り 18:00 頃から雨が降ってきた。

10/25

3:00 起床 4:00 出発 5:00 2600m 7:10 劔岳
9:05 2600m 10:00 早月小屋 13:45 馬場島

前日夜に降り出した雨は夜中には雪に変わり、起きるころにはテントの外は 5 cm 程度の積雪だった。アタック装備で出発し、2600m 地点でアイゼン、ガチャ類を装着。その先獅子頭周辺の鎖場では鎖にセルフをかけて通過した。山頂まで夏道沿いに進むことができた。山頂付近からは、真っ白になった劔沢、立山、白馬が見えた。下りは山頂直下や獅子頭周辺で前爪クライムダウンを強いられたが、特に問題なく通過した。日が昇ってから雪はしぶとく、早月小屋

からだいぶ下っても残っており、滑るメンバーもいた。下山後馬場島で富山県警の山岳救助隊の方に声をかけられた。何か手に書類を持っていたしこちらが信大ということも分かっていたようなので計画書はぼつちり把握されているらしい。山頂まで行ったかどうかや登山道の様子を聞かれたので、県警の人もルート状況等を知りたがっているのだろうかなどと想像した。山頂を踏んできたのは我々だけのようで、微妙な時期に山頂を踏めてラッキーだった。

中央アルプス 木曾駒ヶ岳①

日程：2015/10/10~10/11

ルート：桂小場~西駒山荘~木曾駒ヶ岳~千畳敷駅

メンバー：藪内、稲垣、小笠原、前田

行動記録：

(1 日目) 8:20：桂小場 10:28：避難小屋
12:40：西駒山荘 14:40：木曾駒ヶ岳
15:05：駒ヶ岳頂上山荘

(2 日目) 5:00：起床 6:50：出発 7:58：
千畳敷駅

今回は一年生のみでの山行であった。計画書の予定では 2 日間で木曾駒ヶ岳と空木岳に行くものであった。電車とタクシーを乗り継ぎ、桂小場まで行く。紅葉ももう落ち始めていた。コースタイムほとんど変わらないペースで歩き、西駒山荘に行った。ここまでは特に危険箇所もなく通過した。比較的歩きやすい道であった。西駒山荘では山岳会の OB がいるということを知っていたので挨拶をしてから、山荘を後にした。木曾駒ヶ岳までは岩が出ているところもあり、切れているところもあった。しかし、

通過は問題なく行った。木曾駒ヶ岳山頂で少しゆっくりしてから駒ヶ岳頂上山荘に向かった。この日の行程は頂上山荘で切った。起床し、テントの外は大荒れ。雪交じりの雨が降っていた。おまけに風も強かった。そのため、朝ラーを食べ少しの間待機した。天候は好天することは無いとわかっていたため、メンバー全員で話し合った結果、千畳敷にエスケープすることに決定した。悪天候の中宝剣岳を超えるのは危険であったことと、装備も1年の技術としても太刀打ちできる天候ではなかったためエスケープすることを決定した。明るくなり、テントを速攻でたたみ、出発した。千畳敷までは風も強く、雪交じりの雨であったため、相当つらいものであった。宝剣山荘で一度一本を取り、千畳敷駅までノンストップで行った。もし、行動を続けていたのであれば、おそらく低体温症も十分あり得たであろう。晩秋の雨は本当に冷たい。

中央アルプス 木曾駒ヶ岳②

日程：10/24~25

メンバー：L.植野 山下 河村 村上

10/24(1日目)

8:30 出発

11:00 大樽避難小屋

13:00 西駒山荘

15:30 頂上山荘

10/25(2日目)

3:00 起床

6:46 木曾駒ヶ岳

8:00 宝剣岳

10:00 西駒山荘

13:30 桂小場

良く晴れた朝だった。殆ど雪が無いよう

に見えたので、ワカンとアイゼンを車に残し、登山を開始した。樹林帯は全く雪が無く快適だったが、稜線に出てから影になっているところが凍っていた。西駒山荘では雪が無く、風が非常に冷たかった。眺望は最高だったが、寒かったので上着を着て出発した。馬の背あたりでところどころ凍っており、怖いところもあった。下から見ただけでは細かいところまでは分からない。予想が甘かったように思う。

次の日、テントを撤収する前に木曾駒ヶ岳をピストンした。うっすら雪をかぶっていて冬の訪れを感じさせる様だった。その後、テントを撤収して宝剣岳へ進む。道が全体的に影になっていてかなり凍っていたが、行けると判断し、山頂に立った。しかし、その先も凍っているのが見てとれたので、行程を通すのを断念し、桂小場からの下山を決定、13:30に桂小場へ下山した。

今回の反省は想定が甘かった事だ。見たままでは無く、道が凍っていることを予想すべきだった。アイゼンを持っていけばその先も行程を進めることが出来ただろう。次の教訓にしていきたい。

南アルプス 甲斐駒ヶ岳～鋸岳

日程：10/11～10/12

メンバー：長谷川士門(会2) 大槻泰彦(会2)

コースタイム

1日目 10月11日

6:00 竹宇駒ヶ岳神社発～10:10 五合目小屋跡～11:10 七丈小屋～13:50 甲斐駒ヶ岳山頂～14:55 六合目岩小屋着

2日目 10月12日

4:30 起床～6:00 小屋発～6:40 三ツ頭～7:45

中ノ川乗越～8:30 第 2 高点～9:50 鹿窓～
10:30 第 1 高点～10:50 角兵衛沢のコル～
11:50 樹林帯に入る～13:05 角兵衛沢出合～
14:15 丹溪山荘～15:10 南アルプス林道出
合～15:35 歌宿バス停

本来は長谷川、大槻、河村の 3 人で 10 日に
入山して仙丈ヶ岳も行こうかと考えていた
が、河村が前日に熱を出し、入山延期。仙
丈をカットすることに。1 日待っても河村
の熱が下がらなかったため、長谷川、大槻
の 2 人で行くことにして小淵沢駅にて前泊。
駅のロビー的なところに寝たのだが、これが
失敗だった。まさか電気がひとときも消え
ないとは…。夜中に降り始めた雨を防げた
のは良かったが、2 人とも寝不足で出発。
小淵沢駅で前泊するときはアイマスク必携。
ちなみに小淵沢駅の最寄りコンビニは徒歩
10～15 分のデイリーだ。エロ本が本棚の半
分近くを占めていた。どうした小淵沢。竹
宇駒ヶ岳神社より歩き始めるが、雨がまあ
まあ強い。この長い尾根を雨の中歩き続け
ると思うと気分は重いうえに 2 人とも寝不
足か、またはそれに伴う高山病なのかペー
スがあがらない。しかし、2 人ともこの尾
根を登るのは初めてということもあり、刃
渡りや度重なるボロい梯子、吊り橋などを
楽しみつつ七丈小屋へ。7 月にこの尾根を
おりたとき、小屋の御主人にタクシー代を
おごってもらった御恩があったのでお返し
のつもりで一升瓶のお酒をあげようと思っ
たら、ただでは貰えないとお金をくれた。
これではお返しにならないが、ありがたく
御厚意に甘えさせてもらおう。七丈小屋の
御主人は OB の花谷さんや松田さんとも交
流があり、SAC との関わりがわりと深いよ

うだ。これからも良好な関係を築かせてい
ただきたい。さて、気を取り直して進もう
とするが、小屋近くですれ違った人々が、
山頂付近は雪が降っていてすっかり冬景色
だと口々に言う。体調も悪いしビビる二人。
しかし話し合った末、どんな状態かも見ず
に進退を決めるのはどうかということにと
りあえず進む。結局若干凍えながらである
が甲斐駒ヶ岳登頂。山頂手前ではわずかに
雪が舞っていたが、まだほとんど積もって
いなく、滑ることも全然なかった。登頂す
る頃には雪は止んでいたが、いかんせん寒
い。ろくに休まずにそそくさと通り過ぎる。
甲斐駒から鋸方面の縦走路は踏み跡らしき
ものが点々としていてどこからでも行けそ
うだが油断するとちょっと怖い。細かに言
うと戸台側の斜面と稜上の 2 通りの道があ
るような感じだ。そんなにはっきりしてい
るわけではないが…。今回はほぼ稜上で行
った。どちらにせよ甲斐駒から下り始めて
わりと早くに出てくる下りの鎖場がけっ
こう悪い。冬にアイゼンで通過となると、登
りでも下りでも 1 年がいるならばザイルが
欲しいだろう。六合目岩室は先行パーティ
が 1 隊。入口側にテントを張っていたので
その横に張る。水は担いできたので、噂の
水場は確認しなかった。寒さに負けてしま
ったが、今後のためにもこの時期の水の有
無は確認しておきたかった。まったりあ
ったまり就寝。2 日目は先行パーティが出発
するのを待っていたら、少し遅くなってし
まった。体調は回復してきたと思われたが、
登りにくるとやはりペースがあがらない。
高山病だろうか。中ノ川乗越までは稜上と、
今度は昨日と逆の日向八丁尾根側の斜面の
2 通りの道があるように思える。冬は稜上

の方が進むのが早いだろうが所々戸台側が切れ落ちているように思われた。今回は基本的に斜面を歩いた。第2 高点からの下りは少し道を見失い、迷う。思っていたよりずっと戸台側を巻くようだ。大ギャップに近づこうとすると崖に落ちる。そこから鹿窓直下のルンゼを一回横切りもう一度戻るようにルンゼに吸い込まれるのだが、その横切るところが凍っていてめちゃくちゃ恐かった。鹿窓直下は鎖を使えば問題ないが練習のためにもザイルを出してもよかった。ただ出すならば、開始点は場所を選ばないと狭いし危ない。小ギャップの下りは巻き道のような道で下り、鎖はほぼ使わず。登りで練習も兼ねてザイルを出したが、よっぽどへばった1年生を連れてくる時ぐらいしか必要ないだろう。鎖の補助を使えば危険度はかなり低い。第1 高点で少しゆっくりとして、角兵衛沢へ。角兵衛沢はガレガレで一見道が無いように思えるが、基本的に左岸沿いに踏み跡らしきものが続いている。いずれにしろ歩きづらいことこのうえないが。戸台に下りてからは丹溪山荘から南アルプス林道に向かう。しかし、長谷川が渡渉のタイミングを逃しあたふた。さらにそれで焦って道を勘違いしてしまったため少しタイムロス。最後まで気は抜いてはいけない。丹溪山荘から林道までの道は使っている人なんているのかと不安だったが、意外としっかりしていた。山荘からは良い渡渉点がありませんので、少し戻って橋を渡り、藪をこぐか、ジャブジャブ行くかどちらかだ。歌宿のバス停からバスに乗ったが、時間的にも労力的にも戸台を歩いた方がよかったかも。鋸尾根の夏の縦走はかねてよりやりたかったが、無事に通すことが

出来て良かった。この先も甲斐駒・鋸周辺を攻めていきたい。

◎11月

西上州 妙義山

日程：2015.11.7

メンバー：L 渡部、大槻、河村、城田、長谷川、山下

コース=タイム(9H)

7:30 妙技神社

8:05 大字…※1

10:10 大覗き～天狗岩の間

12:05 鷹戻し手前…※2

14:40 石門…※3

16:30 妙技神社

特記事項、反省、感想

※1 鎖場

最初の鎖は奥ノ院で、稜線上に上がると連続して現れるようになる。稜線までは、ふつうの道を左上してふつうに上がれる。妙義山の岩質は、ホールドスタンスに富む溶岩類で、縦走路上の岩場では比較的浮き石も少なく岩もしっかりとしている。そのお陰で、特別神経を使うのは、中間道へ至るエスケープルートの下降ぐらいである。(後述)

※2 鷹戻し

このルートの核心と呼ばれる箇所。白雲～金洞へ行く方向だと、鎖を継続して60mほど登ることになる。

◎12月

北ア 鹿島槍ヶ岳赤岩尾根

日程：2015/12/5~6

メンバー：長谷川士門(会2) 荒川武大(会4) 北見元(会4) 塩谷晃司(会3) 渡部優

(会 2) 城田曜子 (会 2) 山口耕平 (会 1)
稲垣翔 (会 1)

コースタイム

1 日目 12 月 5 日

7:10 駐車場発～9:20 西俣出合～14:50 高千穂平着

2 日目 12 月 6 日

5:00 起床～6:30B.C 発～9:00 冷乗越～
11:00B.C 着～11:45B.C 発～14:40 西俣出
合～15:50 駐車場着

今年の冬期週末山行 1 発目の赤岩尾根。急斜面が続き、雪崩の心配もあるこのルートだが、冬の鹿島槍を狙うならこの尾根が一番近く早いだろう。朝一で Box を出て鹿島槍スキー場の駐車場へ。そこから林道を 2 ピッチほど歩き、西俣出合・赤岩尾根の取り付きへ。林道の途中で富山大ワンゲル OB の和田さんと富山大山岳部の 1 年生の二人組に追いつかれ、そこからしばらく一緒に行く。林道の途中からだんだんと雪が深くなりラッセルになる。尾根の取り付きは雪渓がまだ発達していなく、渡渉をしたのだが、ここで山口と渡部が足を濡らしたため、靴下を取り換える。二人と塩谷さんを残し、先に進むが、尾根に取り付いて早速始まる急斜面と藪に皆少なからず苦戦。ラッセルは富山大の和田さんがほとんど一人でやっている状態だったので、こちらも先発隊のようなものを出し、ラッセルを交代してもらったりして一緒に進むことに。最初は荒川さん、北見さん、稲垣をラッセル要員に。交代して、北見さん、塩谷さん、長谷川をラッセル要員にしたりして進む。隊が離れすぎないように意識しながら進んだが、入山前に想定していなかった隊の分裂なだけ

に少し不安になった。結果としては悪くない案ではあったが、もう少し慎重に考えたうえで決断すべきだったと思う。結局昨年 1 年生をひきあげた、了幹さんゾーンと呼んでいた場所で合流、そして富山大、信大、そして後続の伊那山仲間の 3 隊がつながって歩くかたちとなった。その後は全体でラッセルするものの深いところは腰くらいまであり進まないの、和田さんの提案で空身ラッセルを実行して、高千穂平までであった。この空身ラッセルも先頭がザックを放置して、ラッセルを交代してからまた取りに帰るので、進み過ぎると一人にしてしまう。また 2 番手が 1 番手より沈みやすいので大変だ。そこに注意すれば早い。高千穂平の標柱の手前でテントを張った。ここまではところどころ雪壁みたいなのところがあり、軽く弱層をみてみたら安心できるか微妙なところだった。2 日目は明るくなってから動き出したと思っていたので、起床は遅め。稜線までの道はところどころ岩も出ていて細いところもあり、1 年生はしっかりみてなくてはいけない。冷乗越にあがる直前はかなりの雪壁になっていてこわかった。ちょうど 9:00 に冷乗越に着き、時間的に撤退を決断。悔しさを胸に下り始める。直下の雪壁は下りもこわい。特にアイゼン歩行に慣れてない 1 年生は 1 歩 1 歩確実に注意してやらなくてははいけない。この雪壁は雪崩の危険性が非常に高いだろう。条件が悪いときは使えない。その後もテント場に着くまでは安心できない。1 年生はアイゼン歩行に良い練習になっただろう。撤収してから歩き始めるも先頭の長谷川、渡部が少し迷う。高千穂平からの下り口は尾根が分岐しているので注意が必要だ。2 人

の事前の想定の甘さが窺えた。その後はサクサク下りる。懸垂をつかうこともなく、西俣出合、駐車場へとついて終了した。今回は富山大ワングル OB の和田さんから様々な話を聞き、実際に少しの間一緒に登山してその考え方を教えてもらえた。その中で自分たちの大きな反省はピークに向かう姿勢についてだ。本気で鹿島槍のピークを狙うならもっと早くに起きるべきだった。実際に和田さんは自分たちよりずっと早くに起きて行動し、南峰への登頂を果たしている。今回は朝の暗いうちからの行動に不安があったために、早く起きた。しかし、それは自分たちの実力不足が原因であるし、絶対に無理だったとは言えない。最低でも歩き出して数分で明るくなる、そんな動き出しで行くべきだっただろう。なんだかんだで歩きだしたのは完全に明るくなってからだった。そんなんで山頂行けずに悔しかったなどとは本来は口に出すのも恥ずかしいことであると思った。12月の山行は天候にもよるが、登頂できないことが多い。だからといって最初から登頂をあきらめた登山では何も得られないし、可能性のギリギリまで攻めて達成できたときの気持ちは何事にも得難いものだろう。登頂できなかったことを悔しがるのではなく、本気で登頂を目指していなかった、ギリギリまで攻めきれなかったことを悔しがり、次に繋げられる山行にしたい。

北ア 唐松岳八方尾根

日程：2015/12/5~6

ルート：

12/5 八方駅=兎平~黒菱平~八方池山荘~八方山~八方池~2300m 付近 T.S.

12/6 T.S.⇔小ピーク~往路下山~黒菱平=兎平=八方駅

メンバー：

会 4)片野

会 3)加藤穂

会 2)L大槻 植野 山下

会 1)会原 藪内

概要

12/5

7:45 八方ローソン集合 8:45~9:15 八方駅発 (ゴンドラ乗車)9:40 兎平発 10:20 黒菱平 11:20 八方池山荘 12:30 八方山ケルン 13:30 八方池 14:30 2300m 付近 T.S.

八方のローソンで長野組、松本組が合流し、ゴンドラリフト「アダム」の八方駅へ向かった。八方駅は 8:00 頃で既にチケット売り場、ゴンドラ乗り場ともに長蛇の列となっており時間を食った。もう少し早く到着するか、ネット等でリフト券の引換券を買っておくと時間短縮になる。先に乗り場の列に並んだメンバーにチケットを渡し、先に兎平でアルペンクワッドのリフト券を買っておいてもらおうと考えていたが、兎平ではアルペンクワッドリフトが点検中であったため、そのままグレンデを歩いて登ることにした。黒菱平まで半分くらい登ったところでリフトが運行を開始し、「隅の方を歩け」と怒られてしまいタイミングの悪さを嘆いた。黒菱平では、リフトの出口付近のみの圧雪で、鎌池、グラートクワッドリフト方面は誰も進入していない雪面であった。グラートクワッドリフトの支柱沿いを登り始めてから、昨年ほど雪がないことを実感した。深く膝と股関節の間くらいのラッ

セルで 1 ピッチ弱で八方池山荘に到着した。雪は少なくラッセルはそれほど辛くなかったが、昨年同様視界が悪く、ホワイトアウトのため空と稜線の境界がよく分からないことがあった。八方池を越えて樹林帯に入る手前にやや細く切れた稜線を通したが、ここは時期や雪質によっては雪庇となりそうだった。テント場はこの樹林帯を少し進んで南西向きの尾根が西向きになり傾斜が強くなるすぐ手前の地点を選んだ。手前に整地は楽そうだが明らかに凹地で吹き溜まりになるだろうというところがあり、そこは避けてテントを張ったが、結果として翌朝テントは雪に埋没しかけて掘り出しに時間と体力を使うこととなってしまった。深夜にかなりの風があるときはあったが、その後は風が弱くなり雪に圧迫されている感じはしなかったためそのまま就寝した。恐らく深夜から早朝にかけて風が強まったのに伴い新雪が流れ込んだものと思われる。これについては最後にまとめて書く。

12/6

4:30 起床 8:00 頃まで朝ラー・掘り出し・撤収 8:30T.S.上の小ピーク 9:00 出発 10:10 八方池山荘 10:50 黒菱平 11:00~12:00 雪上訓練 13:10 八方駅

上に書いたようにテントの掘り出しから 1 日が始まった。テントは概ね入口からの出入りが厳しいくらい埋まっていた。最初は各テントの入り口に一番近い 1 人が外に出て雪を掻き出していたが、とりあえず朝ラーを食べてから会原以外の 6 人で掘り出しに当たった。この時はまだかなり風が強く、地吹雪の状態だったため、掘ってもすぐに雪が流れ込んでくるような状況だった。次

第に北側から晴れてきて白馬三山の朝焼けが見えた頃に風も弱まったため一気に掘り出した。3 人テンのポールが 1 カ所折れていた(掘り出す前から折れていた?)。テントを撤収し団装分けが済んだところで、天候はかなり良くなっていたので、テント場から 5 分ほど登った小ピークまで空身で登った。鹿島槍、五竜、不帰ノ嶮、白馬三山が見えていた。時間的に唐松岳往復に不安があったためここで引き返した。下りは早く、八方池山荘まで 1 ピッチだった。初日に通過したテント場直下の細い稜線は、ワカンのトレースに対して雪のリッジの位置がかなり南側にずれており、北からの風の強さを感じた。ワカンのトレースが盛り上がっていたためそれに沿って下ったが、雪の地形変化の激しさを再認識した。八方山ケルンより下はこの日もガスっていたため、初日に設置した赤旗は安心材料であったが、15 本の赤旗のうち 11 本を使っていたため、唐松アタックを考えるともう少し節約すべきだった。黒菱平ではビーコンサーチを重点的に行った。電波にしっかり乗ること、クロスサーチの際ビーコンを水平・直角に動かすこと等を教えた。その後アルペンクワッドとアダムを乗り継いで八方駅に下山した。

まとめと反省

○1 年生：藪内は元気よくラッセル、会原は 2 番手でも辛そう、2 人ともあまり声は出ていなかった。雪訓に関しては、落ち着いてやれば正しい流れで出来るが、視野を広く周りを見渡すのが苦手に見える。

○テント場の判断について

・樹林帯を抜ければ強風のために幕営適地

は無かったと考えられ、樹林帯の中でもコルでも凹地でもないところを選んだつもりだったが結果的に雪が溜まった。テン場の選択以外には、ブロックを積んで風を逃がすなどの対策がとれたかもしれない。また、急登のすぐ下にテントを張っていたが、雪崩の危険性もあるし、新雪のときはどんどん雪が流れ落ちてくるため、もう少し斜面から遠いところに張るべきだった。

昨年より倍以上は進み、唐松がすぐそこというところまでは行けた。山頂を踏めなかったのは1年生を連れていたから、ではない。次週以降も、後立のピークを確実に踏めるよう狙っていきたい。

北ア 爺ヶ岳南尾根

日程：2015.12.12-13

メンバー：L 渡部(会 2)、蒲澤(会 4)、大槻(会 2)、小山(会 1)、前田(会 1)

1日目

松本＝大町＝柏原新道入口 8:00

～八見ベンチ 9:00

～爺ヶ岳南尾根 JP(2330m)13:30

～B.C.14:00

2日目

B.C.5:00

⇔南峰,爺ヶ岳本峰(ピストン)7:10

～B.C.8:15

～登山口 11:30

悪天とタイムリミットで敗退した去年の記憶と比べると、ほぼ終始足首程度の積雪と微風快晴のコンディションの本山行は、同じ爺南とは思えないほどあっけなく終わってしまった。針ノ木方面がまことにきれい

であった。ヤブがちの尾根下部、ジャンクションまでの距離、ジャンクションからの瘦せすぎない稜線、山頂までの緩やかな登りなど、12月冬山始まりの時期でピークを狙うにはうってつけのルートだと感じた。

北ア 常念岳東南尾根

日程：2015年12月12日(土)～13日(日)

メンバー：[会 2] 山下 耕平(CL) 長谷川

士門 [会 4] 北見 元 小林 滉平 [会 3]

塩谷 晃司 [会 1] 村上 友理 藪内 鷹佑

行程

《1日目》

0610 須砂渡ゲート前発

0725 大平原

0750 東南尾根取り付き

0910 稜線へ出る(1500m 付近)

1300 三俣への夏道分岐付近(T.S.)

BOXを朝5時に出発し、ゲート前に着いたのは5時40分頃であった。松本から常念岳へのアプローチは非常に近い。この段階ではまだ辺りは真っ暗で、ヘッドランプをつけながら出発準備をした。ゲートを抜け、林道を20分ほど歩いていくと、ようやくヘッドランプがいらなくなった。林道を1ピッチちょっと歩いたところで、大平原に着く。目の前に見える東南尾根は真っ茶色。雪が全くない。これは夏道を行ったほうがいいのかも…と思ったが、計画段階での想定が甘く、承認の際に夏道の使用を想定していなかったために、登りは計画通り、大平原から少し行ったところから取り付くことにした。藪であった。稜線へ出るといきなり雪が出てきたが、それでも少し。ビーコンもピッケルも着けずに、テン場である夏道の分岐

付近まで行った。この日のうちに、翌日の下山路を三俣への夏道へと変更することとした。理由は、藪ばかりの急坂を、1時間近く一年生に歩かせるのは危険であり、まだ整備された夏道を使用したほうが、安全だと判断したためである。本来であればこのような想定外の計画変更は許されない。リーダーとして、自分の判断を誤ってしまい、一年生にも不安な思いをさせたと思う。今後は絶対にこのような身勝手な計画変更は行わないとここに誓う。

《2日目》

0330 起床
0435 T.S.発（先発隊は 0420 発、後 0450 頃本隊と合流）
0630 前常念岳
0735 常念岳
0835 前常念岳
0950 T.S.帰着
1020 撤収後、T.S.発
1145 三俣登山口
1345 須砂渡ゲート前

今日の行程で一番不安であった、前常念岳手前の岩場の偵察のため、先発隊（小林、長谷川）を組織したが、もなか雪に苦しめられ、先発隊の出発から 30 分ほどで本隊と合流してしまった。冬合宿を見据えた先発隊組織であったが、改善の余地がありそうだ。その後は前常念岳まで、所々雪が多いところはあったものの、岩場には雪がほとんどついておらず、サクサク進むことができた。岩場手前でワカンからアイゼンに履き替えた。夏道をたどることができたため、ザイルは出さなかった。前常念岳から常念

岳にかけても、細い稜線となる箇所もあったが、ザイルを出すことなく進んだ。常念岳山頂からの眺望は皆無であったが、それでも今冬初ピークであったため、達成感を味わうことができた。下りはクライムダウンを多用しつつも、サクッとテント場に戻り、夏道である三俣方面へと下った。

北ア 霞沢岳西尾根

日程：2015 年 12 月 19 日(土)～20(日)

メンバー：[会 2] 山下 耕平(CL) [会 3]

内田 祥平 蒲澤 翔 [会 1] 稲垣 翔 村上 友理

行程

《1日目》

0750 釜トンネル前発
0840 霞沢岳西尾根取り付き
1040 1900m 付近(T.S.)

雪がない！本当に雪がない。長い長い釜トンネルを抜けた先に見えたのは雪国…ではなく、藪だらけの霞沢岳西尾根であった。西尾根下部は地面に申し訳程度の雪と、大量の藪。藪漕ぎに少し時間を取られたが、それでも 2 ピッチでテント場まで到着してしまった。これ以上高度をあげてもテントが張れるところはないので、今日はここで行動終了！早い！

《2日目》

0400 起床
0510 ベースキャンプ発
0530 1950mJP
0710 2600m 岩峰
0750 霞沢岳
0930 ベースキャンプ帰着・撤収

1110 霞沢岳西尾根取り付き

1150 釜トンネル前

JP から先も、本当に雪は少ない。ラッセルなんて皆無であったから、ワカンを持たずにアイゼンで出発した。2600m 岩峰は、1年生を 30m ほど引き上げた。上級生であったらザイルがなくても大丈夫であった。そこから霞沢岳山頂はすぐである。穂高の雄姿を拝むことができた。帰り、2600m 岩峰は懸垂した。ベースキャンプまで下り、そこから先は、藪々であるためアイゼンを履いたまま下った。10:50 頃、下る尾根を外してしまい急斜面をカニ歩きでトラバースをした際、稲垣が足を滑らせ、10m ほど滑落した。本人に怪我はなく、大事には至らなかったものの、一步間違えれば重大な事故となった事案であり、上級生として深く反省した。1年生のけがは上級生の責任である。ルート取りや一年生のフォローなど、上級生としてやらなければいけないことはたくさんあったのに、それを怠ってしまった。

北ア 八方尾根山スキー

日程：2015/12/12

メンバー：荒川武大(会 4) 加藤穂高(会 3)

行程(文責加藤)：

09:00 アダム山頂駅

10:30 八方池山荘

11:00 八方山

11:20 八方池

13:00 扇雪溪

13:30 丸山

14:00 唐松岳頂上山荘

14:30 唐松岳

14:50 唐松岳頂上山荘

15:10 丸山

15:50 扇雪溪

16:30 八方池

16:50 八方山

17:10 八方池山荘

17:30 アダム山頂駅

コンドラリフトアダム山頂駅よりゲレンデを登っていく。八方池山荘を過ぎたあたりからピーカンで暑いほど。荒川さんはスキーにシール、私はボードを背負ってワカンで登る。唐松山荘からは空身で唐松岳をピストン。山頂は風がない。下降に移ろうとするとおっさんがひとり山頂からぶっ続けで滑っていた。すごい。私たちは丸山下で少しだけパウダーをさわった程度であとはずっとガリガリアイスバーンだった。ゲレンデに降りてきた頃には真っ暗に。下まで雪が繋がっていれば滑って帰れるのに、暖冬にやられた。

念願かなって初山ボードでした。スキーとの機動力の差を埋めるのがいかに大変か分かった。やっぱりボードは割るしかないのかな。出発が遅かったわりには、山頂踏んで1日で帰ってこれた。いままで八方尾根といえばモガモガと腰上ラッセルを強いられ日帰りピークハントなんて夢のまた夢だったが、スキー履いてクラストどピーカンの日を選べば十分可能性はあった。

中ア 木曾駒ヶ岳

日程：2015/12/19~20

メンバー：会 3) 塩谷 会 2) L 大槻 城田
会 1) 会原 小山 山口

記録：

12/19

6:25 ゲート 7:20 桂小場発 11:30 茶臼山分岐
12:40 西駒山荘

12/20

4:00 起床 5:20 出発 6:10 濃ヶ池上 7:45 木曾
駒ヶ岳(~8:10) 9:15 濃ヶ池分岐と遭難記念
碑の中間 10:15 西駒山荘(~10:40) 13:05
1750m 付近 13:45 桂小場

12/19

ゲートから信大西駒演習林宿舎の先の登山
口まではほとんど雪がなく、40分程度でつ
く。登り始めてしばらくは同じく雪は少な
く、夏のペースで進む。大樽避難小屋を過
ぎて胸突八丁の登りに差しかかっても雪は
少し増える程度で、しかも高速道路がで
きていたのでやはり夏並みのペースで進んだ。
この土日は高気圧がドンピシャで日本上空
を通過していて、両日ともピーカン。胸突
の頭で稜線での風や反射に備えサングラス、
ヤッケ等を身に付ける。稜線に上がると御
嶽がすぐ目の前に見えた。そこから1ピッ
チ弱で西駒山荘に到着。冬季小屋の石室は
はじめ入口が分からなかったが、トイレの
建物に「入口は南側」と書いてあり行って
みると雪に埋まっていた。掘り出しても引
き戸のレールが凍っていて開かなかったの
で窓から中に入って内側からも攻める(?)こ
とで何とか開けた。奥のスペースにテント
を張り(6人用テントはぎりぎり)エッセ
ンの鍋を食べ就寝。夕方から夜中はかなり風
が強かった。

12/20

5:20 に西駒山荘を出発。1ピッチ目はだ
んと赤くなっていく南アルプスの稜線を
横目にヘッデン行動。濃ヶ池あたりまでは
稜線は広く滑落の心配は少ない。また広い

と言ってもちゃんと方角さえ合わせていれ
ばまず迷うことのない尾根である。

濃ヶ池を過ぎ、駒飼ノ池の上の稜線あたり
から細く両側の斜面が切れているところや
岩場が出てくるが、ザイルが必要になると
ころはなかった。今回はモナカ雪を踏んで
バランスを崩す方があり得そうな危険だ
った。

2時間半ほどで木曾駒の山頂に到着。この
とき本州中部上空は高気圧のほぼ中心で、
雲は見渡す限り殆どなく、北ア、中ア、南
ア、富士山、白山、頸城山塊、奥秩父、そ
して日本海(糸魚川方面)まで見える快晴で
あった。

まとめ

冬合宿前最後の山行であり、天候には恵ま
れたが、贅沢なことを言うと来週には槍を
目指して3000mの稜線を歩くのだから、も
う少し冬の厳しさを味わいたかった面もあ
る。そもそも今冬は暖冬の影響か週末山行
ではほとんど厳しい気象条件等を経験でき
ていないままである。冬合宿に向けて気を
引き締めていきたい。

八ヶ岳 赤岳真教寺尾根

日程：12/19~12/20

メンバー：L.植野 片野 内田 城田 会
原 山口

12/19(1日目)

8:05 美しの森

11:03 牛首山

12:30 2300m 付近 T.S.

12/20(2日目)

3:30 起床

5:00 出発

9:24 赤岳

11:30 横岳

12:55 硫黄岳

14:20 赤岳鉱泉

17:00 美濃戸口

伊那で前泊し、車で清里、美しの森の登山口に向かった。雪が降りそうな曇り空のなかで入山した。雪は驚くほど少なく、初日はテン場まで殆ど無かった。サクサク進み、テン場でゆっくりした。水づくりに必要な雪を確保するのが大変だった。

2日目、まだ暗いうちにヘッドライトを付けて登攀を開始する。ところによっては細い尾根を大したラッセルもせず高度をどんどん稼いだ。赤岳の稜線に出る少し手前で鎖場が出てきたので、城田と1年をザイルで引き上げた。自分が最初に登ったのだが、鎖を辿るルートにこだわってしまい、結局、内田さんに先行してもらって隊の行動を遅らせてしまった。もっと、視野を広く持つべきだったように思う。

その後、赤岳から横岳を通り、硫黄岳に13:00 ごろに到着した。稜線上も雪は薄く、殆ど夏道を利用出来た。結局、ザイルを出したのは尾根上の一カ所のみだったが、雪がもっとあれば、横岳近くの稜線を乗越すところなどフィックスの必要が出てくる箇所もあるだろう。

今年は例外で、例年通りの雪量だったならもっと時間がかかるように思う。下山は美濃戸口に17:00 になったが、もう少しペースを上げる必要があった。主な要因は、メンバーのバテ、悪場の通過の遅れだろう。ペースが上がらないことへの危機感を自分自身、もっと持つ必要があった。次に行く場合は、この記録は雪が非常に少ない年のものなので、雪がしっかりあることを想定

してほしい。

八ヶ岳 編笠山～赤岳

日程：12/19～12/20

メンバー：長谷川士門 植野侃太郎(会2)

加藤穂高(会3) 前田達樹 藪内鷹佑(会1)

コースタイム：

1日目 12月20日

6:00 ゲート発～7:30 富士見～8:00 雲海～

9:15 押手川分岐～10:30 編笠山～11:10 青年小屋着

2日目 12月21日

3:00 起床～5:00 小屋発～7:10 権現岳～9:30

キレット小屋～12:25 赤岳山頂～12:50 赤岳展望山荘～14:00 行者小屋～16:45 下山

前日に小淵沢駅にて前泊。自分は今年度2回目。電気の消えない駅の改札はわかっていたので大丈夫だったが、今度は駅の小さな宣伝用ディスプレイ？が延々とCMを流している地獄。加藤、藪内はそれによって寝不足だったらしい。さらにCMの吉永小百合の声が山行中ずっと頭から離れないというおまけ付きである。ステーションビバークに対する対策だろうか。小淵沢駅の宿泊にはアイマスク、耳栓がおすすめ。それさえあれば快適な屋根付き空間が得られる。朝は10分ほどタクシーに揺られて登山口手前のゲートまで。観音平手前から登山道に入るがやはり今年は雪がないため、富士見までは運動靴で歩いた。編笠山山頂直下ではさすがに雪が少しあったが、その薄い雪の下にたまに凍りが張ってあり嫌らしい。そこからはいつも通り嫌な大岩通りを抜けて青年小屋に、キレット小屋まで行くことも考えたが、タイム的に微妙に厳しいので、

ここで就寝。とはいえ割と早めについたのでのんびりお楽しみ解放。藪内がなんかめちゃくちゃ重そうなおでんのバックを持ってきた。寝不足にプラスしてそれがつらかったようだ。よく頑張った。小屋はほとんど人が来たが、お年寄りが多く、翌日のスタート時間を考慮して入口側に陣取らせてもらった。この狭い小屋ではこういった配慮は大事だろう。2 日目もラッセルは皆無。サクサク進んだが、権現岳直下では、必要に応じて鎖 Fix を使い、夏道通しで通過した。その後もキレット小屋、赤岳山頂までは、ザイルは出さなかったものの、要所所で鎖を使った Fix を会 1 に指示し、通過する。基本的に夏道で通した。落石が少々不安だったが特に怖い展開もなく山頂に到着した。風も少なく、ピーカンの稜線歩きは気持ちよかったが、やはり場所によっては嫌な雪のつき方であったり、常にアイゼン歩きで落石の危険もあっただったので慎重に、緊張感を保ちながら行動した。そこからは地蔵尾根を通過して行者小屋に向かう。細く急な尾根で、一般登山者も多かったためここはここで嫌だった。行者小屋で一服したが、晴れた日のこの場所は八ヶ岳のいろんなバリエーションルートが見られてわくわくする。あとはそそくさと南沢沿いを帰るのみだが、やっぱりたまに下が凍っていて嫌な感じ。コケること数回、なんとか日が暮れる前に下山した。今回の山行は冬山とは思えないほどの穏やかな天気のもとで冬合宿前のもものとしては不安が残ったが、2 日目の長時間にわたるアイゼン歩行は会 1 の二人にとって良いアイゼンワークの練習となったと思う。なにより天気の良い日の冬山はとても美しく、感動する。

上級生としては鎖をつかったとはいえ、Fix を使用する判断が適切だったかどうかは反省としてあがった。2 日目は予想以上の長時間行動となり、そこには 1 年生を鎖 Fix によって通過させる判断をした場所で本当にそこまでする必要があったか、その適切な判断ができてなかったのではないかとということが原因にあげられる。要は安全を意識するあまり、過剰に慎重な判断をしていたから時間がかかってしまったのかもしれないということだ。安全に行くことはもちろん大事だが、時間をかけすぎると余計な体力を失い、それもまた事故に繋がる。安全を保ちつつも素早い行動ができるように判断を下すのが、当たり前のことながら難しいものだと改めて感じた。

八ヶ岳 横岳西面・石尊稜

日程：2015 年 12 月 20 日

メンバー：○片野亜紀、北見元

行程：

4：40 美濃戸発

6：20 行者小屋

7：30 取りつき(前にパーティーがいたため、30 分ほど待機)

8：00 登攀開始

10：30 稜線着

12：00 行者小屋

13：20 美濃戸

快晴の八ヶ岳は気持ちよく、人も大勢いた。取りつきまでの沢で、三叉峰ルンゼに入りそうになるが、親切なパーティーに教えてもらい事なきことを得る。石尊稜への道は、中山乗越近くの赤い橋から沢へ入り、沢の分岐をどちらも右を選択していけばつく。取りつきでガイド中の花谷さんと遭遇。前

を登攀されていたが、瞬く間にいなくなった。石尊稜も私たちのパーティーの後ろにも一組いた。石尊稜自体も雪も少なく、雪稜ではなかった。むしろ草付きにアイゼンを突き刺して進むという感じだった。ザイル自体は、下部で1ピッチ(北見リード)、上部で1ピッチ(片野リード)の合計2ピッチだし、その他はコンテで通過した。1ピッチ目は、アイゼンの先でのる感覚がしっかりしていないとリードはかなりこわいだろう。途中、終了点があるが、50m2本であれば問題なく次の終了点まで伸ばせる。60m2本であればなお安心か。2ピッチ目は、リッジを少し右にまいて通過した。風もなく穏やかであったので、寒さは感じることなく、快適な登攀ができた。

八ヶ岳 横岳西面・中山尾根・大同心雲稜

期間：12/19,20,

メンバー：小林, 荒川 (会 4)

コースタイム：

12/19 中山尾根【曇り後晴れ】

6:00 美濃戸口 発

7:30 赤岳鉱泉 着

8:30 発

10:15 下部岩壁取りつき

(1P~10:50, 2P~11:30)

12:00 上部岩壁取りつき

(1P~12:30, 2P~12:50, 3P~13:40, 4P~14:00)

14:00 トラバース終 (登攀終了)

14:30 地蔵尾根分岐

16:00 赤岳鉱泉 着

12/20【晴れ】

6:20 赤岳鉱泉 発

7:45 取りつき 8:20 登攀開始

(1P~9:50, 2P~11:20, 3P~12:10, 4P~13:10)

13:10 ドーム直下 (登攀終了)

15:00 赤岳鉱泉 着

17:30 美濃戸口

概要・所感

中山尾根：下部岩壁 1P は 3 本ほどルートが選べたが正面のフェースに打ってあるペツルに導かれるように登った。難しくはないが見かけよりも怖かった印象。やはり右のレンゼ状ルート(正規?)が登りやすいのか。2P は左に巻いてクラック上に登っていく。5m ほどの岩パートが終わり草付斜面を終えるとほぼ歩きになる。最後に小さい岩を超えるとブッシュでビレイ。雪稜パートとなる。コンテで歩いたが上部に近くなると少々怖い。不安ならビレイが必要。上部岩壁 1P 目は快適なレンゼであったが核心手前で先行パーティ待ちとなりいいところを荒川に取られてしまった。その核心部も残置ハーケンが 1m おきくらいにあり、恐怖心は和らげてくれる。その核心を超えると再び歩き、反り立った壁が立ちほだかる。先行パーティがハング越えに苦しんでいるのを見ていたので途中から左に巻いてみた。自分達的にはスッキリしたライン取りであったが…。最後のトラバースは高度感があるがなんてことはない。山頂まで継続登攀する場合のルート(IV級凹角)はけっこうえぐそうであった。

大同心雲稜：1P ハング越えに一苦勞。時間かかってしまった。2P 再び人工だがルートを外したのか残置も少なくリードの荒川は苦勞していた。怖いフェースであった。3P 凹角からカンテまで。カムも決まり快適に登れた。4P 凹角に登りドーム基部のトラバ

ース手前まで。最初の凹角はハーケンめつた刺しで A0 しながらのぼる。けっこう怖かった。トラバースをさくっと終わらせてドーム基部へ。時間切れで下降を決定。ロープは出さずに大同心基部まで戻れた。

2 日間とも残置に助けられた。支点構築はもちろんルーファイも楽をしてしまったなという印象。雪が少なくて丸見えだったが、ベツタリつかれたりえびのしっぽができたりすると大変難しくなるだろう。あと登攀中のガチャ類の収納, 特にアブミとアックスを邪魔にならないやり方を研究したい。すごいストレス。

2016 年

◎1 月

北ア 五竜岳遠見尾根

日程 : 2016 年 1 月 15 日(金)~17 日(日)

メンバー : [会 2] 山下 耕平(CL) 城田 曜子 [会 4] 片野 亜紀 [会 3] 加藤 穂高

[会 1] 稲垣 翔 前田 達樹 藪内 鷹佑

行程

《 1 日目 》

0910 白馬五竜テレキャビンアルプス平駅

0940 地蔵の頭

1140 小遠見山

1320 中遠見山

1430 大遠見山

1520 ベースキャンプ着(大遠見岳先 2130m 付近)

今年の遠見尾根は雪が少なかった。しかし、トレースがついていないこともあって、予定していたテント場(西遠見山)まで行くことができなかった。自分たちの弱さが浮き

彫りになってしまった。天気は、最初は晴れており風もなかったが、中遠見を超えるぐらいから徐々に風が強くなり、大遠見を超えたときには顔が痛いくらいになっていた。時間も時間だし、ここにすっか、という感じで、大遠見より少し先の凹地にベースキャンプを張った。翌日、ここからでも十分五竜岳は狙えるし。

《 2 日目 》

0430 起床

0555 ベースキャンプ発

0725 西遠見岳

1030 白岳

1050 五竜山荘

1300 五竜岳

1440 五竜山荘

1630 ベースキャンプ着

今日は五竜岳アタックの日である。前日、隣のテントの片野さんから頂いた差し入れのジンギスカンを持って余してしまい、今日の朝ラーに入れてみた穂高・山下・藪内テント。結果は撃沈。朝から獣くさい 3 人。そのせいで撤収がないのにも関わらず、出発が遅れてしまった。反省である。西遠見までは、それまでよりも雪が多くなり、腰ぐらいのラッセル。全員でラッセルを回してはいたものの、ここまでもこの先も穂高さんに頼ることとなってしまった。西遠見で、11:00 までに五竜山荘に着かなければ五竜岳アタックはしないことにすると決定。その後、白岳へと進んでいくが、どうしたものか、標高を上げれば上げるほど、雪の量が多くなっていく。おかしいな～、怖いな～、怖いな～、と思いつつ、なんとか頑

張って白岳、五竜山荘まで進んだ。11:00
前であり、視界こそないものの風は穏やか
であったため、五竜岳アタックすることに
した。稜線上は比較的雪が少なかった。岩
やハイマツが出ており、アイゼンを履いて
いたがかなり慎重に五竜岳まで歩みを進め
た。五竜山頂。感動。五竜の下りは、クラ
イムダウンを多用しつつ、慎重に下った。
この際、稲垣が指に凍傷を負ってしまった。
(稲垣の凍傷に関しては事故報告書を参照
してください)五竜山荘から下るのはあっ
という間。下りって早いのねーと言いつつ、
ベースキャンプへ帰着。明日に備えて寝る。

《 3 日目 》

0530 起床
0700 ベースキャンプ発
0750 中遠見山
0820 小遠見岳
0910 白馬五竜テレキャビンアルプス平駅
着

武田菱が綺麗に見える五竜岳を背景に、ア
ルプス平駅までサクッと下った。穂高さん
はスノーボードを持参していたので、テレ
キャビンには乗らず、白馬五竜スキー場を
下った。

北ア 錫杖岳

期間：1/16,17,

メンバー：小林(会 4), 松田(OB)

コースタイム：

1/16 入山【曇り後晴れ】

8:45 槍見温泉 発

10:50 錫杖沢出合

12:50 錫杖岩小屋 着

14:00 発
15:10 左方カンテ取りつき 着
15:40 登攀開始 (1Pのみ)
17:00 左方カンテ取りつき
18:00 岩小屋 着
1/17【晴れ後曇り】
6:30 岩小屋発
9:00 3ルンゼ 登攀開始 (3Pから?)
13:30 CSのチムニーF6 (登攀終了)
14:30 取りつき
15:30 岩小屋 着
16:10 岩小屋 発
18:10 槍見温泉 着

概要・所感

暖冬のため氷が未発達で悪いクライミン
グになった。初日、ワンさんが夜勤残業明
けで入山が遅れる。錫杖沢出合までは足首
から膝下までの積雪でツボ足。沢に入った
途端が腰まで増えた。新雪のため軽いが濡
れる。岩小屋までは夏道の記憶をたどりと
にかくラッセル。岩小屋は地面が出ていた、
驚き。水も出ていた、最高。時間がないた
め左方カンテ取りつきまで登り始めだけク
ライミングをすることに。ツバリ勝利の小
林がリード。新雪のため固まりもせずはら
えば岩が出てくる。草付も凍っていなかつ
たが 1P目は傾斜も緩いため難なく登れた。
2人登ったら暗くなってきたので懸垂で下
降。2日目は3ルンゼの登攀。左方カンテ
取りつきから3ルンゼまでは再び深いラッ
セル。F1とF2はノーザイルでトポの2P
は省略できた。朝一は晴れて暖かかったた
め取りつき部にはスノーシャワーが流れ込
んでくる。ワンさんリードで登攀開始。リ
ード中に1度雪崩と言っていいくらいの雪
も流れてきた。F4まで。続いて小林リード

で F6 手前まで。F6 を挑戦するも登れなかったのでワンさんと交代。抜け口にアックスが決まらずあと一歩が出ず敗退。懸垂 2 回で取りつきまで下降。登ることができず実力不足がはっきりとわかった。だが八ヶ岳などでは体験できないような内容でいい刺激になった。1 月はやっぱり早いのかな、いいシーズンにまた登りたい。

北ア 爺ヶ岳東尾根

日程：1/15~1/16

メンバー：L.植野 蒲澤 長谷川 小山
会原 村上

1/15(一日目)

8:00 出発

9:20 北東からの支尾根に合流

12:00 2000m 付近 T.S.

1/16(二日目)

5:00 起床

6:10 出発

10:15 爺ヶ岳南峰

12:40 T.S.帰着

13:30 T.S.出発

15:30 下山

赤岩尾根入山口の大谷原へ向かう道の途中、鹿島集落から入山した。登山者に向けた注意書きの立て札が道路沿いにあるのでわかりやすい。最初は石碑の横を通り過ぎて、尾根に合流するまで急登をひたすら行く。雪が殆ど無かったので逆に歩きづらかった。支尾根に合流する少し手前から段々雪が積もりはじめ、膝下くらいのラッセルになった。時々ズボったが、順調に高度を稼ぎ、1767 ピークを越え、1978 ピークを越えてしばらく行ったところでテントを張った。

翌日、アタック装備で爺ヶ岳を目指した。天気は快晴、ところにより膝上のラッセルになったが快適だった。南峰に立つと後立山の峰々が最高に綺麗に見えた。鹿島槍が非常にかっこよく、意欲を掻き立てられた。その後、往路で下山。最初の急登が悪く、神経を使った。

今回の反省は行きに尾根の側面を横切った箇所があったが、雪がゆるんできた帰りもそこを通過してしまった事、危機感が欠如していたことである。深く考えず、行きのトレースをそのまま辿ってしまった。行きの間に帰りのルートを考える必要があったが、登りに気を取られ、殆ど考えていなかった。反省である。

南ア 鋸岳～甲斐駒ヶ岳

日程：2016.1.15-17(実動 3 予備 0)

行程：戸台～鋸岳～甲斐駒ヶ岳～戸台

メンバー：L 渡部(会 2)、塩谷(会 3)、

大槻(会 2)、山口(会 1)

コースタイム

1.15

6:00 伊那(出発)

7:30 戸台川登山道入り口

8:50 角兵衛沢出合い

13:20 角兵衛沢コル=T.S.1

1.16

6:00 出発

8:20 鹿窓真上

10:50 第二高点

13:30 6 合目小屋(T.S.2)

1.17

5:50 出発

7:45 甲斐駒ヶ岳

13:30 戸台川登山道入り口

特記事項

・小ギャップのアンカーは、鎖の支点のリングボルト2つからとった。

・小ギャップ～鹿窓の鎖場の通過は、反省に記す。

・大ギャップのアンカーは、生木と残置スリング。アンカー候補はいくつかあり、コルへ直に降りられるものがベスト。大ギャップへ最初は緩やかに下っていくが、割と上部で仙丈側に向かっておくとベストのアンカーにたどり着けると思う。

今回は、八ヶ岳側の沢に45mくらいで降り、コルまで登り返した。

・大ギャップ～第二高点のルートは、雪つきより夏道を選択。コルより左上し、草付きを直登するラインもみえてはいたが、最初が不安定に見えたのでやめた。

・甲斐駒ヶ岳 2840m 小ピーク手前の鎖場は、山口のみを引き上げで確保し通過した。

反省

●技術の選択と戦略について

・小ギャップ～鹿窓の鎖場は、引き上げを想定していたが、現場に立つと想定より長く(25m 前後か)縦フィックスの方が適格であった。

・その判断が遅く、先を見据えた行動ができなかった。小ギャップへの下降前に鎖場は見えていた。小ギャップにさしかかった段階で、装備を揃えた2年が先に下降し、後続の下降、ザイルの回収の間に工作を開始する行動に展開する指示が出せなかった。

・また、鎖場の途中まではノーザイルでいけるだろうと先行の2年で取り付いたが、実際はてこずり、もたついた。

・計画段階で想定したうえで、現場の情報

(距離や悪さなど)よりの確な技術の選択をする力が足りなかった。意識的に経験を積んでいきたい。

●他

・鋸岳はヴァリエーションルートにあたり、1年生への緊張感を持続させるような声かけをもっとすべきであった。

八ヶ岳ソロ縦走

日程：2016年1月9日～10日

山城：八ヶ岳 北八ヶ岳ロープウェイ～縞枯山～麦草峠～天狗岳～夏沢峠～硫黄岳～横岳～赤岳～権現岳～観音平

メンバー：北見元(会4)

記録：

1月9日

9:15 北八ヶ岳ロープウェイ山頂駅出発～
9:50 縞枯山～10:10 茶臼山～10:40 麦草峠～
11:25 丸山～12:10 中山～13:40 天狗岳～
14:15 根石岳～14:50 夏沢峠～15:00 テント
設営 17:00 就寝

1月10日

3:30 起床 5:00 出発～5:40 硫黄岳～6:40
横岳～8:00 赤岳～10:50 権現岳～13:00 観
音平

雪は思ったより少なく順調に行動することができた。冬山での単独登山は初めてであり、特にテント設営や設営後のテント内での生活面では手探りの状態だった。今回の山行で考えながら、より効率化、快適化を目指して工夫していくことができた。行動面では単独登山の場合、やはり事故・遭難が怖いので慎重に進むことを心掛けた。今後、もっと雪が深かった場合や、長期間

の山行になった場合も含めて、冬山で気をつけるべきことは何かを考えることができ、良い経験になった。

八ヶ岳 阿弥陀岳南稜

日程：2016年1月9-10日

山域：八ヶ岳 阿弥陀岳南稜

メンバー：◎片野重紀、加藤了幹、小笠原一樹

行程：

1月9日 朝雪、のち晴れ 1月10日 曇り
のち晴れ

5:00 舟山十字路発

6:30 間違いに気づき引き返す

8:00 阿弥陀岳南稜の分岐

10:30 立場岳

10:50 青ナギ 5:00 起床

6:30 出発

7:10 無名峰

9:00 P3

9:45 阿弥陀岳山頂

14:00 舟山十字路

今回の山行は、10月に左足首を骨折した加藤の復帰戦及びリハビリ、腰痛もちの小笠原の様子をみる事が一番の目的であった。

当初の予定は、1日目に南稜、2日目に北稜を登る予定であったが、朝一で道を間違えてしまい、引き返した際に時間をロスしてしまった。間違えた原因は、安易に標識に従ってしまい、暗かったため阿弥陀岳南稜の分岐を見逃してしまったためである。下調べ不足がもろにでてしまった。10:30に立場岳に着き雪も少なかったため、その日のうちに越えてしまえないこともないとは思ったが、加藤にとっても久々の山であ

り、立場岳に向かう時も、他人が見て指摘できるほど足を引きずって歩いてたため、加藤と相談した結果無理をせず南稜上で一泊することを決めた。雪は極めて少なく、ある場所でも足首程である。

2日目は明るくなってから出発し、無名峰を過ぎたあたりでアイゼンを履き、順調にピークを左に巻きながら通過した。1年生の小笠原もアイゼンでの岩稜歩きははじめてといていたが、ひっかけたりすることなくついてくる。P3のルンゼでは、片野がリードで2Pロープを上から小笠原をひきあげる形でだした。了幹はザイルなしで小笠原のあとを一緒に歩いてくるといった形をとった。雪が少なく、クラストしている部分が多かったため、アイゼンの前爪でカツカツと登るといった感じだった。上級生ならロープなしでも問題なかったが、1年生なら迷わずロープをだすべきだ。小笠原も前爪での歩行に慣れていなかったため、慎重に登っていた。小笠原は四つん這いでの立ちこみの際、腰が痛むといていたが、それ以外の時は痛みは少ないようだ。その後のP4は左から巻いてあつという間に阿弥陀岳山頂にでる。御子屋尾根での下りは予想以上に了幹の足首の負担があるようで、ピッチの最後のほうでは痛みが蓄積するらしく、かなりつらそうに歩いていた。4時間かけ御子屋尾根を下ったが、了幹のリハビリといった意味では、南稜だけでよかったのかもしれない。

八ヶ岳定着登攀

日程：1/25-28

メンバー：蒲澤・塩谷

記録：

1/25 赤岳鉱泉アイスクャンディー
10:00 赤岳山荘
12:00 行者小屋
13:00 赤岳鉱泉
16:30 行者小屋

1/26 石尊稜
5:30 起床
7:00 行者小屋発
8:30-9:45 下部岩壁
10:00-11:15 雪稜(コンテ)
11:30-12:15 上部岩壁
12:35 石尊峰
13:30 行者小屋

1/27 中山尾根
4:30 起床
6:00 行者小屋発
7:00-8:30 下部岩壁 2p
9:20-10:00 上部岩壁 1p
10:40 登山道
11:30 行者小屋

1/28 大同心南稜・小同心クラック
3:30 起床
5:00 行者小屋発
6:45-8:20 大同心南稜
9:10-10:30 小同心クラック
11:00 大同心基部
12:10 行者小屋
14:00 赤岳山荘

休学コンビで八ヶ岳に定着してバリエーションを登った。天気も良く、積雪も少なかったのでラッセルすることもほぼなく各ルートまでアプローチすることが出来た。今

回の山行で八ヶ岳の西面の概念が掴めたのでよかった。本来は東面も行く予定だったが最終日の天候が悪かったので中止してしまい残念だった。次は東面に定着するのいいかもしれない。

◎2月

北ア 笠ヶ岳広サコ尾根

日程：2/3~2/5

メンバー：L内田（会3）、山下（会2）、山口（会1）、小山（会1）

2/3

7:40 中尾高原口 駐車

9:30 錫杖沢出合

11:30 1750mT.S

2/4

6:10 T.S 発

7:40 1950m（急斜面手前）

9:30 2300m（尾根消えるところ）

10:40 クリヤの頭

11:50 雷鳥岩

14:00 2470mのコル B.C

2/5

6:10 B.C 発

8:10 笠ヶ岳

8:50 B.C

9:30 B.C 発

10:40 雷鳥岩

11:20 クリヤの頭

13:45 1750m（1日目のT.S）

14:40 錫杖沢出合

15:50 中尾高原

概要

笠ヶ岳は穴毛谷や広サコ尾根などを含めると4ルートほど登れるルートがある。その中でも比較的登りやすそうである広サコ尾根を今回は選択。過去の記録を探してみるもののSACはおろかネットですら敗退記録が出てきたぐらいの有様であった。全くの道であったため日程も多めに計画を立てた。当日、車は槍見温泉に駐車禁止？（利用者のみ？）であったため、中尾高原口の駐車場に駐車。もちろん、私たちの車のみ。登山口は槍見温泉の手前から。夏道も出ていてサクサク。サクサクすぎて特に報告書に書くようなこともない。強いて言うなら大して難しくない渡渉点が1か所。気が付けば3ピッチほどで計画で予定していたT.Sに。尾根に乗るとなかなか行動を切るタイミングが難しくなってしまうので予定通り1750mでテントを張った。その後尾根の末端を偵察。2日目、予定では2200mまで。だが、尾根に乗ると程よい雪質と積雪量であり、急斜面もあるがサクサク進む。予定地までは3時間ほどで到着、ひよっとすると今日中に笠ヶ岳冬季小屋まで行けるのでは欲が出た。2300mの地形図で尾根が消えるポイントは雪崩斜面であり用心しながら進む。そこを抜けるとクリヤの頭。クリヤの頭からコルに下り、登り返したところが雷鳥岩。雷鳥岩からの下りが少々悪かったため、懸垂を1ピッチ、支点は岩。雷鳥岩から3つほど小ピークを越えた先に笠ヶ岳がある。昼前に雷鳥岩につき、これは冬季小屋まで行けると確信していたが1つ小ピークを越えたあたりで1年生2人の顔に疲労が出始めていたためコルでB.Cを作り、明日ピストンすることにした。コルは風が

強いためブロックで防風壁を作った。この壁が有効であったため夜は快適に過ごすことが出来た。アタック当日、天気は快晴。2ピッチで山頂。あとは下山して終了。ザイルを出した箇所は3箇所。登りは雷鳥岩からの懸垂(40m~50m)支点は岩。下りは2200m残置fixありの急斜面での懸垂60m、支点は木。残りは2000mから50mほどの懸垂、支点は木。危険箇所はザイルを出した箇所に加えて2300mの雪崩危険箇所、クリヤの頭~山頂までの雪庇。頑張れば1泊2日で可能である。

北ア 錫杖岳

日程：2/16-17

メンバー：蒲澤・江川(OB)・松田(OB)

記録：

2/16 左方カンテ

6:30 駐車場

10:00 錫杖沢出合

12:00 左方カンテ開始

16:00 下降開始

17:00 錫杖沢出合

2/17 3ルンゼ

3:30 起床

5:00 出発

7:00 3ルンゼ

13:00 下降開始

17:00 錫杖沢出合

18:30 駐車場

今年は積雪量が少なく、例年よりコンディションとしては悪かったようだ。それでも、左方カンテ・3ルンゼ共に敗退してしまったのは実力不足が原因だった。初めて本格

的なミックスルートを登ってみたが、突破力のなさを感じた。また錫杖岳は残置支点がほとんどないので、支点の幅を広げることと、ランナウトに耐える精神力も必要だと感じた。普段あまり使わないトライカム等も練習していきたい。

北ア 燕岳

日程：2/15~2/17

メンバー：L.植野 山下 藪内 前田

2/15(1日目)

7:35 宮城ゲート発

11:00 中房温泉

13:00 第一ベンチ T.S.

2/16(2日目)

5:15 出発

8:30 合戦小屋

10:00 燕山荘

11:20 燕岳

12:00 燕山荘帰着

14:19 T.S.帰着

2/17(3日目)

6:30 出発

6:50 中房温泉

9:30 宮城ゲート

元々は13日から入山して蝶ヶ岳まで縦走する計画であったが、天候の悪化による途中の林道の雪崩のリスク回避のために、入山を遅らせ、燕岳ピストンに変更した。結果として、この判断は正解だったように思う。林道だけでなく、下部の登山道においてもデブリが散見された。そこを慎重に抜けると、上部は雪崩跡が無く安定していたので、次の日ピストンすることを決めて第一ベンチにてテントを張った。水場が使えたので、水づくりの必要が無く快適だった。

た。

翌日、明るくなってから行動を開始した。登山道脇に雪が高く積もっていたため、夏道上を進んだが、モナカ雪になっていて歩きづらかった。格闘しながら合戦小屋に着いたのが8:30。ワカンを外し、アイゼンを装着する。樹林帯を抜けると風が強かった。風速20mくらいだろうか、顔が非常に冷たかったが、暫し小屋の中で休憩し燕岳ピストンに出発する。

寒くて何も見えなかったので山頂にたつすぐに、そそくさと退参する。快適な小屋に戻って少し休憩した後、下山を開始した。登りと違い、蛇行する登山道をまっすぐ突っ切ったおかげで非常に早く降れて気持ちよかった。3日目は中房温泉に下りてまた林道に戻りゲートに9:30に着いた。

今回のリスク回避の判断は難しかった。気温が急に上がり、雪崩が起りやすくなるという予報であったので妥当だったとも言えるが、あくまでその地域においては分からない。みすみす、行く機会を逃すことになりたくないという思いもあった。結局、県警に問い合わせた雪崩のリスクについて助言をもらい、その言葉に頼る形になってしまった。しかし、本来は自分で確たる根拠を持って判断を下せるようにしなければならない。頑張りたい。

北ア 槍ヶ岳北鎌尾根～南岳西尾根

後日掲載

南ア 塩見岳～聖岳

日程：2016年2月24日～3月5日

メンバー：L 塩谷晃司(会3) 大槻泰彦(会2) 山下耕平(会2) 小山悠太(会1) 村上友理(会

1)

行程：沼平～二軒小屋～塩見岳・蝙蝠尾根～
荒川岳～赤石岳～聖岳東尾根～沼平

行動記録：

2/24 5:00 松本=11:30-12:00 沼平ゲート
～13:50 中ノ宿吊橋～15:35 赤石ダム～16:40
樫島

2/25 6:15 T.S 発～9:45-10:30 二軒小屋
～10:50 蝙蝠尾根取付～13:15 2070m 地点
～15:00 二軒小屋

2/26 6:15 T.S 発～8:20 2070m 地点～12:10
徳右衛門岳～14:15 2600m 地点

2/27 5:20 T.S 発～6:15 森林限界～7:10 蝙蝠
岳～9:15 北俣岳～9:35 2850m 地点

2/28 7:00 T.S 発～7:10 北俣岳～8:10 2920m
ピーク～9:00 塩見岳東峰～12:00 塩見小屋
～14:30 本谷山～15:45 三伏峠

2/29 沈殿

3/1 6:10 T.S 発～7:30 烏帽子岳～8:05 前小河
内岳～8:45 小河内岳～13:00 板屋岳～14:00 高
山裏避難小屋

3/2 5:50 T.S 発～7:10 主稜線下降点～8:15 対
岸の尾根乗越～10:30 荒川前岳～12:30 荒川
小屋

3/3 5:45 T.S 発～6:25-7:35 大聖寺平～8:05 荒
川小屋

3/4 4:40 T.S 発～5:20 大聖寺平～6:50 赤石岳
～8:55 百間洞上コル～10:25 大沢岳～10:50 中
盛丸山～12:35 兎岳～12:45 兎岳避難小屋

3/5 6:20 T.S 発～7:25 聖兎のコル～10:20 聖
岳～10:45 奥聖岳～12:20 白蓬の頭～13:15
JP～15:35-16:00 東俣林道出合～18:45 沼平
ゲート

〈林道〉

この縦走は、27km の林道歩きから始ま

る。40kg の装備を背負っての歩行は拷問そ
のもの。早速靴擦れにやられるメンバーも
いた。伝付峠から入山すればそれは解消さ
れるが、下山したところに車があるメリッ
トは大きく、周回のルートとした。林道に
雪はほぼなかったが、特に樫島から先は凍
結しており注意が必要だった。

〈蝙蝠尾根～塩見岳～三伏峠〉

蝙蝠尾根は特別な危険箇所はないが、特
筆すべきはその長さである。総距離は約
10km にもおよぶ。2/25 は 2070m まで食料
や登攀具などの荷揚げをして二軒小屋に戻
ったが、これは少雪の影響で水を得られな
い可能性があったからだ。実際には 2200m
くらいからは、水を作るには十分な積雪が
あった。下部はルートが明瞭であるが、徳
右衛門岳から先は幼木が繁茂しており、ル
ート取りによっては藪漕ぎを強いられる。
この日は森林限界手前を T.S とし、翌日に
塩見越えを狙ったが、村上の体調がすぐれ
ず天候も悪化傾向であったため、2850m 付
近を T.S とした。

28 日、風が収まるのを待って、塩見岳を
めざす。北俣岳から主稜線までコンテで行
動。コンテの場合は、塩谷、村上、大槻パ
ーティと、山下、小山パーティでロープを
一本ずつ使用し、塩谷が構築した中間支
点を後続パーティにも使用させる形で通過
した。塩見岳の下りでは、1p 懸垂下降を
した。この際、荷物が重かったためバック
アップ懸垂とした。安全圏の塩見小屋まで
3 時間もかけてしまったことは反省である。
権右衛門山は、夏道から巻いたが、目印は
豊富だった。翌日は低気圧による悪天で、
三伏峠にて沈殿。

〈三伏峠～荒川岳～荒川小屋〉

3/1は高山裏避難小屋まで。烏帽子岳、小河内岳あたりは森林限界を抜けているが、そこからは樹林帯。少々甘く見ている部分もあったが、板屋岳周辺は信州側が切れ落ちていて気を抜くことができなかった。第二の核心、荒川岳は主稜線から沢を一本挟んだ尾根から取付いた。ひとまず主稜線の尾根に上がり、沢に下降してトラバースしたが、大きなロスもなく雪崩の危険性も比較的少ないルート取りができたと思う。対岸の尾根はさしたる悪場もなく、快適に登行することができた。荒川岳の下降はコンテで行動。ルーファイにはかなり神経を使った。支点は岩角、ナッツ、スノーバーなどを使用して、多めにとることを意識した。

〈荒川小屋~赤石岳~聖岳東尾根〉

3/3、この日赤石を越える予定だったが、強風により大聖寺平付近でツェルトを被って一時待機。一時間ほど粘っても風が収まらないので、荒川小屋に引き返した。2 沈目となるが、ここで英気を養えたことは後々により影響を及ぼすことになった。

3/4、日本列島をすっぽりと高気圧が覆った。朝一で赤石岳を突破し、百間平方面へ進む。赤石からの下りは緊張感のあるクライムダウンとトラバースが続いた。もっと右へルートをとれば、トラバースを少なくすることができた。また、クライムダウンなどでは後輩の力量を信頼してロープを出さない判断をした。ロープを出していたらきりがなく、確実な支点も取りにくいという状況ではあったが、この判断は考え物である。この日は大沢岳、中盛丸山、兎岳を越えて、兎岳避難小屋の脇を T.S とする。二日の予定を一日で行くことに成功した。

3/5、朝からホワイトアウト。風は弱く、信州側の崩壊を意識しながらルーファイをすれば問題ないと判断し、聖兎の科尔への下降を開始。ダケカンバで支点をとりながらコンテで行動し、聖岳の登りの雪壁状でスタカットする。2700m 付近でロープを解除し、聖岳山頂へ。視界はゼロだったが、この縦走の最後を飾るのに相応しいピークだった。

東尾根の下降は白一色で神経を使ったが、登りのトレースが残っているところもあり、心理的重圧を軽減させてくれた。樹林帯に入るとマーキングが多数あり、ルーファイに困ることはなかった。

〈最後に〉

ヒマラヤから帰ってきて、私はある感情に飢えていた。それは一言でいえば達成感である。こうやってしまうとなんだか軽いような気がしないでもないが、とにかく私は完全燃焼できるような登山をしたかった。自分の未熟さにより消火不良で終わったヒマラヤからはや 3 か月、今の自分をすべてぶつける登山ができたことは本当によかった。それぞれがやり切ったという感情を抱える一方で、課題も多く見えてきていると思う。今後にもつながるよい登山ができたのではないか。

八ヶ岳 阿弥陀岳南稜・北稜・中央稜

日程：2/5~2/6

メンバー：長谷川士門（会 2） 渡部優（会 2）

コースタイム：

1 日目 2 月 5 日

6:00 舟山十字路発~8:55 立場岳~10:05 無名峰~12:00 P3 ルンゼ~13:00 阿弥陀岳~

14:45 阿弥陀岳北稜 JP 着

2 日目 2 月 6 日

6:00 起床～7:00 テン場発～8:00 北稜第一岩峰取り付き着～8:15 出発～10:50 阿弥陀岳山頂～11:15 御小屋尾根阿弥陀中央稜分岐～14:25 下山

前日に茅野駅にて前泊、駅構内の一角にテントを張ってしまい、堂々と寝た。余計なゴミが捨てられるコンビニが遠いこと以外、静かで明るすぎず、良い環境だった。2 月 5 日の朝、タクシーで登山口へ向かう。タクシーの運転手は道中御柱祭のことを詳細に教えてくれ、さらに登山口についてからも、僕らの出発準備が終わるまで車のライトで照らし続けてくれた。2 月の極寒の早朝、この運転手の心の温もりは僕らの心をつたい、体の震えまでもとめてくれそうだった。感謝を伝え運転手と別れて出発したが、本当に今年は雪が少ない。雪が多いときは見逃してしまうこともたまにあるという南稜への分岐の看板もぼっち確認し、取り付いていく。道はひたすらわかりやすく、変に雪がついて滑ることもあったが、ラッセルのラの字もでない。というか、本当に雪がない。無名峰からは南稜の核心である P3 のルンゼにむけてガチャを装備し挑む。P3 のルンゼは茅野側を巻いていくと突如あらわれるが、鎖のアンカーを支点に開始点は作れそう。今回は雪がちょうど良く乗ってしまっていたのでダブルアックスの形で確保せずに登り切った。その後は迷うようなところはあまりなかったが、足場が細かったり、微妙に嫌な乗越があったりと阿弥陀岳山頂までは簡単には気が抜けない。確保のしようもあまりないので歩きの出来

てない一年などは連れていきたくないところだ。この日は天気も良く、八ヶ岳の山脈がよく見えて気持ち良かった。予定では中岳沢から行者小屋に下りて泊まる予定だったが、時間もあるので北稜の JP まであがり様子をみてテントを張ってしまうことに。2 人用のテント場ならばなんとか作れそうだったので、そこで茅野の町明かりや行者小屋のテン場の明かりを見下ろしつつ、ウォークマンから流れる音楽とコンビニで買ったちっちゃいワインで乾杯。この静かなテン場だからこその至福の時間であった。次の日の寝坊が無ければ完璧だったのだが…。2 日目は予定より 1 時間遅れて起床。あんなちっちゃなワインで寝坊とはなんと恥ずかしい…。ほぼ道の上にテントを張ったので、他の登山者の邪魔にならなければよかったが、知る限りでは大丈夫そう。あまりほめられた行為ではないだろうから反省せねば。ただ北稜の第一岩峰取り付きまでは 30 分。朝一からかなりの急登なのできついが、このアプローチの良さはやはり魅力だ。うしろから来た単独の人に先を譲ってから登攀開始。まず渡部がリードでいったが、普段の岩トレとは違い、1 泊 2 日の荷物の重さが予想以上に恐怖を誘う。決して難しくはないが無理はしないで一度リード交代。長谷川が 1 ピッチ目に行く。乗越が怖かったが、アイゼンの前爪をしっかり効かせて信頼し、突破。岩をつかって支点をつくり早めにピッチを切った。次に 2 ピッチ目はリード交代、第二岩峰は 1 ピッチ目よりはヒヤッとするとところがないが、慎重にいかないとやはり怖い。そのあとのナイフリッジもなんとなく通過。支点はその先の木で取った。そしてザイルを回収して歩いて阿弥

陀岳山頂へ。やはり、バリエーションの経験不足と荷物の予想以上の重さから、思ったよりもずっと時間がかかってしまった。また、冬の登攀においては、時間がかかるにつれて、待っている方もどんどん体力を奪われていき、迅速な判断と素早い行動が重要であると改めて実感した。ただ、時間をかけて考え、ザイルをつかって登頂した阿弥陀岳の山頂は、あまり天気が良くなかったが、前日の登頂とはまた違う達成感があった。下山もまたバリエーションの中央稜を通る。気を抜かずに進み、必要ならば懸垂下降もしようと思っていたが、結局ノーザイルで降りしまった。御小屋尾根からの分岐は尾根もわかりやすく、うっすら踏み跡もあったおかげで迷うことはなかった。尾根通しで行くと、30分ほど下りたところで一度懸垂しようかというところがあったが、御小屋尾根側にクライムダウンで少し下りるとすぐにまた合流できると判断し、そのように下りた。ちゃんと復帰のイメージをもって下らないと、無駄に登り返すことにもなりそうなので少し注意だ。その後も一か所、トラロープによって南稜側に誘導される場所があった。けっこうなピンクテープの量もあり間違えなさそうだが、もしトラロープを突っ切っていたら、断崖が待っている。ダブルロープでも足りるかどうかの壁だったので、こっちに進んだら戻った方が楽だろう。その後もテープとうっすらの踏み跡を頼りにぐんぐん下りて、無事にまた最初の登山口に着いた。終了後は会2二人だけで冬季のバリエーションに行けた喜びが大きかったが、特に登攀パートの北稜での判断やザイルワークの遅さなどが反省としてあり、まだまだこれからである

ことを実感した。荷物の重さも普段の岩トレからの準備不足だったことは明らかである。また、今年は雪が少なく、さらに随所に踏み跡、ピンクテープがあり、道がわかりやすかった。これらの条件が無ければどうなっていたかはわからず、運が良かったことは確かだろう。終わってみれば、この時期の会2には、ささやかな達成感と多くの反省を得ることができた。そして、これからの課題を再認識する意味でも良い山行であったと言えるだろう。

八ヶ岳 旭岳東稜

日程：2/9-10

メンバー：蒲澤・塩谷・藪内

記録：

2/9

8:45 美しの森駐車場

10:30 出合小屋

2/10

4:00 起床

5:20 出合小屋発

6:30 五段の宮手前のリッジ コンテ開始

9:20 五段の宮

12:30 旭岳山頂

13:00 ツルネの頭

14:00 出合小屋

16:00 美しの森

冬バリエーション初めての一年生を連れての山行だったので、ロープや支点を多めに使って登った。途中ダブル50m伸ばしてコンテで登ったが、フリクションが強すぎてきつかった。面倒でもロープを繋ぎ直すべきだった。藪内は五段の宮のところ結構手こずっていたようだが、何とか登ってき

てくれた。上級生としてはしっかり確保した核心部よりも、稜線上などの方が気を遣わされた。コースタイム的にワンデイか別のルートと合わせて計画してもいいかもしれない。

◎3月

北ア 鹿島槍ヶ岳東尾根

日程：3/16-17

メンバー：蒲澤・塩谷

記録：

3/16

6:15 大谷原

7:00 東尾根取付き

9:15 一ノ沢の頭

10:40 二ノ沢の頭

12:00-14:00 第一岩峰

15:00 第二岩峰手前 2570mTS

3/17

7:00 起床

8:15 出発

9:15-10:00 第二岩峰

10:30 鹿島槍ヶ岳北峰

11:00 鹿島槍ヶ岳南峰

12:15 冷池山荘

12:55 赤岩の頭 西沢下降

15:20 大谷原

二日間とも快晴で汗だくになりながら登った。尾根上部では雪庇が崩れかかっているところがあり慎重に歩いた。技術的に難しいところはないが、天候やラッセルの有無で印象が大きく変わるところだろう。条件のいい日を狙って登りたい。反省としては

2日目に寝坊してしまったことだ。雪の締まった時間に核心部を越える予定が、グサグサの雪を超えることになってしまった。

中ア 木曾駒ヶ岳～空木岳

日程：2016.3.3～9

メンバー：L 渡部(会 2)、加藤穂(会 3)、長谷川(会 2)、藪内(会 1)

1 日目

桂小場 8:00～大樽小屋 11:20～胸突き八丁付近＝T.S.14:00

2 日目

T.S.5:45～木曾駒ヶ岳 9:00～宝剣山荘付近＝T.S.9:45⇔宝剣頂上(偵察)11:20

3.4 日目：沈殿

5 日目

T.S.8:00～宝剣岳 9:30～極楽平 12:40～檜尾避難小屋 16:00

6 日目

T.S.6:00～木曾殿乗越 9:00～空木岳 12:15～<池山尾根>菅の台 18:00

まず、最近の山行と降雪状況からワカンをおいていったが、トレースがなかったら1日目と6日目の尾根を歩くルートで支障をきたしていた。長い尾根を歩く場合はあまり安易にワカンを置いていく選択肢を取らないほうがよい。

初日はメンバーの調子が上がらなかったため、予定の西駒山荘よりも手前で行程を止めた。

2日目は、3日目の天候も問題ないという予想とこの先テン場適地が遠いことから、午前中に宝剣山荘までたどり着いていたがここで行程をとめた。振り返れば、時間的には攻めればいけたと思うが、偵察でシステ

ム、アンカーの目安をつけた上での 5 日目の時間であったから、リスクも考えるとあの状況では妥当であったと思う。

後二日間半、ガスに巻かれここで停滞をする羽目になる。5 日目では出発のリミットを 8 時におき、ギリギリでガスが切れたので出発した。ガスだけであったので慎重過ぎる判断だったかもしれないが、5 日目に実際歩いてみて、視界が無ければルーファイが厳しい箇所があったので、結局は良かったと思う。会 1 の藪内もいたので宝剣山荘～山頂間で引き上げ 2 回し、極楽平までは懸垂を三回おこなった。途中、埋まっていた鎖も使えた。

空木越えでは、第一ピーク～山頂間で夏道トラバースは使えなかったので、手前のロンゼを上がりバンドを移動後、スタカットを一回し山頂に至る夏道に合流した。

計画では駒峰ヒュッテで行程を止める予定だったが、調子もよかったのでこの日におけることにした。

天候もまずまずで本パーティには各人実りのあるよいルートであったように思う。当初は会 2 だけで計画していたが、宝剣と特に空木のワンポイントで会 2 だけでは不安のある箇所があったので、会 2 だけでいくのはあまりおすすめできない。

南ア 鳳凰三山

日程：3月11日～3月13日

メンバー：L城田(会2)、加藤(了)、北見(会4)、山口、前田(会1)

行動記録：

〈1日目〉

8:25 葦崎駅

10:00 御座石鉱泉

14:35 燕頭山

15:35 2200m付近(T.S)

葦崎駅からタクシーで御座石鉱泉へ。事前のタクシー会社の話では、御座石鉱泉までタクシーで入れるということであったが、前日の降雪もあり、御座石鉱泉より 1 kmほど手前のところで車に限界が。そのためここから歩いてスタートとなった。当初テント場予定地であった燕頭山までは急登が続くが、雪の少なさゆえにラッセルすることもなく、拍子抜けしてしまった。時間もまだ早かったため、燕頭山から 1 ピッチのぼした尾根上でテントを張った。

〈2日目〉

3:30 起床

7:15 鳳凰小屋

9:30 稜上

12:45 観音ヶ岳

14:03 薬師ヶ岳

15:33 南御室小屋(T.S)

鳳凰小屋までで、尾根右側をトラバースしなければならぬ箇所がでてくる。ランナーをとることはせず、ここはカニ歩きで一同慎重に進んだ。また、鳳凰小屋付近の沢周辺では、ホワイトアウト時のルーファイは注意が必要だ。鳳凰小屋を過ぎてからは、徐々に雪の量も多くなり、賽の河原付近になるとクラストし始める。稜線が見えてきてからが遠い・・・稜上は風もそれほどなく、快適に進めたが、時折背丈をも超えるラッセルを強いられるのは正直予想外であった。薬師ヶ岳小屋を超えてしまえば、のちに樹林帯に入る。この日は少し長い南御室小屋まで歩みを進めた。

〈3日目〉

4:00 起床

6:00 葛平
7:10 杖立峠
8:15 夜叉神峠
9:05 駐車場

昨夜から前田の咳が気になる、早く下ってしまおう。昨日、夜叉神からの入山者が多かったと見えてトレースもばっちり。ポブスレーのコースさながらのトレースを、ありがたく使わせていただき、夜叉神峠へと向かった。

南ア 北岳～仙丈ヶ岳ソロ縦走

日程：2016年3月13日～18日 6日間
山城：南アルプス北部 夜叉神峠登山口～池山吊尾根～北岳～間ノ岳～三峰岳～仙丈ヶ岳～北沢峠～戸台
メンバー：北見元(会 4)

記録：

3月13日

(4:00 南御室小屋起床 5:30 出発～8:15 夜叉神峠小屋～9:00 夜叉神峠登山口)10:30 登山口出発～11:30 鷲ノ住山入り口～13:30 池山吊尾根とりつき～15:30 1600m 付近 T.S.18:00 就寝

鳳凰三山山行終了後、デポを回収し継続して単独行を開始。池山吊尾根はとりつきから雪が少なく 1600m 付近まで登り水を作る。

3月14日

2:30 起床 4:00 出発～6:00 池山小屋～9:30 城峰～14:30 砂払 T.S.～空身偵察・トレース付け～18:30 就寝

池山小屋を通過してから雪が深くなる。荷物も重く、急斜面や雪が深くズボリやすいところは空身ラッセルで通過。明け方から1日中雪が降っており、雪ともがいてた

めテント内では急いで衣服を乾かす。

3月15日

3:30 起床 7:00 出発～13:50 北岳～16:00 北岳山荘 19:00 就寝

夜から風が強くなり起床してからも吹いていたため、弱くなるのを待ってから出発。ズボリと荷物の重みに苦しみながらも青空の下北岳登頂。八本歯ノコルで懸垂下降を1回、ザイルの出番はここだけだった。北岳山荘へは夏道をたどったが、トラバースは慎重に通過。

3月16日

2:30 起床 4:40 出発～5:50 中白峰山～7:50 間ノ岳～9:30 三峰岳～16:30 2350m T.S.

間ノ岳～三峰岳間は途中から雪が深くなりアイゼンの上からワカンを着用。これだと前爪がききづらいため、凍った斜面等が出てきた場合には面倒でもこまめにワカンを外す。三峰岳からの下りも全く気が抜けない。樹林帯に入ってから下りでルーファイが慎重になるうえ、雪が深く思うように進まない。

3月17日

2:00 起床 4:00 出発～5:40 野呂川越～7:20 横川岳～12:10 伊那荒倉岳～14:30 2500m T.S.～2600m 付近まで偵察・トレース付け～18:00 就寝

前日に引き続き雪は深い。さらに気温が上がってから雪がワカンにつき非常に重い。早めにテン場を決め、空身で100mほど登って偵察しトレースをつける。

3月18日

0:00 起床 2:00 出発～7:15 大仙丈ヶ岳～
8:20 仙丈ヶ岳～9:30 小仙丈ヶ岳～10:20 大
滝頭～12:40 北沢峠～17:50 戸台

日が昇ると雪が重くなるため、暗いう
ちにヘッテンで行動を開始。樹林帯を抜
けからはアイゼンの上からワカンの着脱を
繰り返し登る。徐々に天気は崩れ夜には雨
が降り出す予報だったので仙丈ヶ岳登頂後
は、戸台を目指す。暗くなる前に下山でき
た。

鳳凰三山山行が予定より 1 日はやく下山
できたこともあり、予備含め 14 日分の食料
を担いでの入山だった。今回のようなエス
ケープの少ない縦走の場合には予備が多い
方が安心だが、山行によってはもっと予備
を減らし撤退の見切りを早めにつけること
で軽量化を図ることも必要と思った。

アイゼンの上からワカンを履く場面が何
度か出てきたが、アイゼンの前爪がきかな
くなるため、急斜面が出てきたらワカンを
外す等、先の状況を見極める必要がある。

行動も生活もパーティ山行では分担、協
力して行えることを全て一人でこなす必要
があり夏のソロ山行よりもはるかに厳しい
環境だった。特に行動ではボッカやラッセル
といった体力面も厳しかったが、ルーフ
アイを含めた精神面の負担が大きく、山行
中はずっと気を張り続けているような状態
だった。

谷川連峰 荒沢山・大源太山

日程：2016 年 3 月 24 日～27 日

メンバー：L 塩谷晃司(会 3) 大槻泰彦(会 2)
山下耕平(会 2)

行程：

・土樽～荒沢山(敗退)※計画上は足拍子岳へ
の縦走

・旭原～ブドー尾根～大源太山～弥助尾根～旭
原

・土樽～仙ノ倉山北尾根(敗退)

行動記録：

3 月 24 日(1 日目)

6:50 土樽駅～7:00 取りつき～9:10 荒沢山
～11:20 土樽駅

春の空気はどこへやら。久々に寒気到来、
重たく湿った新潟の雪がどかどかと降って
いる。一晩中、明かりの消えぬ土樽駅で最
悪の目覚めをして、眠い眼をこすりながら
無言で準備する。せめて、荒沢山だけは……。
この時点で、負けていたのだろうか。言い
換えてみれば、「荒沢山だけでいいや」なの
だから。

駅を出て、橋を渡り左折する。カドナミ
沢の右岸から取付くが、尾根は判然としな
い。林道から 2～30m ほど上がった台地
には地形図に載っている建物の跡地があるの
で、これを目印にするとよい。

カドナミ尾根は、粘土質の土の上に積雪
があって、かなり滑りやすい。上部に行く
と尾根がやせているところもあるが、特に
問題はなかった。荒沢山山頂ではホワイト
アウトに近い状態で、これ以上進むには時
間も読めず危険という判断で、往路を下降
した。

1300m 台のピークで樹林もあるのだから、
多少視界が悪くても確実なルーフアイ
能力があれば問題ないし、時間がかかるこ
とが予想されるのであれば早く出ればいい。
この敗退は、モチベーションの問題だ。

3 月 25 日(2 日目)

相変わらず冬型が緩まないの、無理に

動くより予備日を消費したほうがよいという判断で入山せず。

3月26日(3日目)

5:40 旭原~6:00 ブドー尾根取付~9:00 ヨセ沢ノ頭~9:45 最低コル~11:10 第二岩峰上~11:40 大源太山~15:15 ヤスケ沢~16:30 旭原

ついに好天周期がめぐってきた。大源太西面の尾根は、谷川岳東尾根の代替案として用意していたものだ。旭原に駐車し、ゴルフ場からブドー尾根に取りつく。このブドー尾根、さしたる悪場もなく非常に登りやすい尾根である。この尾根自体に魅力があるわけではなく、大源太山の北面を登るためのアプローチと言ったほうが正確かもしれない。

ヨセ沢ノ頭から見る大源太は絶望的に険しいが、第一、第二岩峰は密藪をつかんでうまくルーファイすれば、ロープの必要はなかった。しかし、所々でナイフリッジがあり、緊張させられる場面もあった。

このルートの核心は、間違いなく弥助尾根だった。積雪が十分にあれば問題ないのであろうが、シャクナゲの藪漕ぎに苦しめられた。末端まで行かず、夏道の尾根から林道へ出た方がよかったかもしれない。

3月27日(4日目)

仙ノ倉北尾根に取りつこうとするも、林道で山下が足の付け根の痛みを訴えたため、敗退。

谷川連峰の雪稜を何本も登攀したいということで計画した山行であったが、報告書を書くのが嫌なくらい何もせず終わった。僕らはまだまだ弱い。身体的な面もそうだが、特に精神面で。もっと強くなって、マイホ

ーム谷川に帰ってきます。

《事故報告書》

五竜岳・遠見尾根における凍傷の事故報告書

報告者：会 2 山下耕平

1. 事故の概要

事故者：稲垣 翔(会 1)

事故型：右手薬指・中指・親指，左手小指・中指先端部分の凍傷

2. 山行計画の概要

期間：2016年1月15日(金)～17日(日)(実働日3日+予備日2日)

山行日程：1日目 白馬五竜スキー場～(遠見尾根)～西遠見手前 2200m 付近(T.S.)

2日目 T.S.⇄白岳⇄五竜山荘⇄五竜岳(アタック装備にてピストン)

3日目 T.S.～(遠見尾根)～白馬五竜スキー場

エスケープ：全行程往路下山。

山行人員：山下耕平(会 2, 山行リーダー), 片野亜紀(会 4), 加藤穂高(会 3),

城田曜子(会 2), 稲垣 翔(会 1, 当事者), 前田達樹(会 1), 藪内鷹佑(会 1)

現役留守：加藤 了幹(会 4)

3. 行動記録

1月15日(曇り時々晴れ，風は午後になるにつれ強く)

09:10 白馬五竜テレキャビンアルプス平駅発

09:40 地藏の頭

11:40 小遠見岳

13:20 中遠見岳

14:30 大遠見岳

15:20 ベースキャンプ着(大遠見岳先 2130m 付近)

1月16日(曇り，稜線へ出るまでは風はおだやか、稜線上は弱い風が常に吹く)

05:55 ベースキャンプ発

07:25 西遠見岳

10:30 白岳

10:50 五竜山荘

13:00 五竜岳

14:40 五竜山荘

16:30 ベースキャンプ着

1月17日(快晴，風は弱い)

07:00 ベースキャンプ撤収・発

07:50 中遠見岳

08:20 小遠見岳

4. 凍傷にいたるまで

行動初日である 15 日は、天候はまずまずであり、深いところでは腰までのラッセルを強いられるため、テムレスまたはゴム手袋を着用して行動した。中遠見岳付近より天候が悪化し始め、時折強い風が北から吹き付けるようになった。時間も 15:00 頃になり、翌日はアタック装備での五竜岳ピストンのため、行程は予定よりも手前の、大遠見岳少し先の、2130m 付近とすることにした。この日は、稲垣には凍傷の兆候は見られなかった。

16 日の五竜岳は、アタック装備で向かった。初めは深くても腰ほどのラッセルであったが、上部に行くにつれ雪の量が増え、胸や頭付近までのラッセルをすることもあった。標高は 2500m を超えていたが、ラッセルということもあり、稲垣をはじめ数名がゴム手袋を着用して行動していた。稲垣はラッセル中、指先の冷たさを感じたが、指を動かすことで凍傷への対策をしていた。このとき稲垣は、防寒テムレスを着用していたが、その下には何も着用していなかった。10:50 に五竜山荘に到着した。五竜山荘着が 11:00 よりも前であれば五竜岳のアタックをする予定であったため、五竜岳へのアタックを決行した。稲垣は、防寒テムレスの中は濡れていないと判断し、防寒テムレス 1 枚のみで五竜岳へアタックした。往路・復路ともに、クライムアップ・クライムダウンといった、雪面に長時間指を付けていなくてはならない箇所があり、また稜線上であるから弱い風が常に吹き付けているという状況であった。この際も稲垣は指先の冷たさを感じ、指を動かすことで対処しようとした。しかし、冷たさが痛さになり、初めは動かすことで感覚が戻っていたものが、徐々に戻りにくくなり、復路時には完全に感覚がなかった。五竜山荘へ戻り、そのままの状態ベースキャンプへと下山した(16:30)。

5. 凍傷後の対応

ベースキャンプへ帰着した後、16:40 より火器のプレ火を開始し、16:45 に着火した。この際も稲垣の指先は感覚がなかった。テント(片野、城田、稲垣、前田の 4 人)内で手袋をとったところ、水疱にはなっていなかった。火器で暖を取るような形で指先を温めた。感覚がなかった指に徐々に痛みが出始め、右薬指と左小指がすぐに膨らみ始めた。この際稲垣は、自身が凍傷になったとは認識していなかったが、水疱になったことで、エッセンの最中であった 17:10 頃に片野が凍傷に気付く。感覚が戻りつつあったことから、特別な処置はせず、水疱をつぶさないように指先をかばうような形でエッセンを続けた。就寝前、保湿のためにワセリンを塗って、そのまま就寝した。

翌日、出発前に稲垣が凍傷になったと申告し、凍傷が全体に把握された。稲垣には、インナー手袋とオーバー手袋を二重に着けさせ、ピックルを頻繁に持ち替えることや、指をあまり使わないようにと指示をし、白馬五竜テレキャビンアルプス平駅まで自力で下山させた。この際稲垣の指先は、痛みはなく、水疱のため感覚が鈍く、動かしづらいよう

あった。

6. 医師の診察内容、症状の変化(2月14日現在)

下山翌日の18日、城西病院の皮膚科を受診した。診断結果としては、やけどと一緒にあり、水疱はできているものの、壊死はしておらず、進行もしていないことから、様子を見ることとした。水疱が緊満していたため、注射器で水疱に穴を空け、水を出した。その後はガーゼと絆創膏で傷口を保護し、化膿止めとして塗り薬の抗生物質、飲み薬の抗生物質と胃薬を処方された。また、できるだけ指を使わないようにとの指示を受けた。医師の診断では、最終的には皮がむけ治るといふ。

症状としては、一番重症であった右薬指は、18日には指先が青紫色になっていたものが、2日後20日には赤黒く変色した。またその次に重症であると思われた左小指は、水疱で膨らんだものの、色は普段とあまり変わらず、水を抜いた後は赤くなった。後の指は、下山後感覚が鈍くなっており、硬くなってきた。2月14日現在の症状は、医師の診断通り、火傷と同様に皮がむけ、完治へと向かっている。なお、症状の重かった右薬指は熱いものや冷たいものなど、刺激に対して敏感になっている。

7. 今回の事故の原因、反省

今回の事故は、1年生への山行リーダー・上級生の指示不足が原因である。稜線上では本来ならばオーバー手袋等、防風・防寒性に優れた手袋をつけなければならないところを、防寒テムレスのままの者がいたことに対して、山行リーダーとして注意喚起ができていなかった。稲垣によると、冬合宿も含めて、今回の五竜岳アタックの日の天候が、経験上、一番悪かったそうである。このように1年生は冬山の経験が浅く、判断力も不十分である。そのような状況で、適切な指示するのがリーダー・上級生の役割である。冬合宿を経たからといって、1年生を過信するようなことはせず、1年生はあくまでも冬山初心者という姿勢で山へ連れて行かなければならなかったのに、それをしなかった。また、そのような初心者に凍傷の怖さを十分に伝えられていれば、稜線上で防寒テムレス1枚で行動するといったことにはつながらなかったと思う。1年生の凍傷は上級生の責任である。上級生が細かいところまで気を配ることができなかったことが、本件の原因である。

また、稲垣の凍傷発覚後、全体への共有が翌朝になってしまったことに関して、全体での情報共有が不十分であったことも反省である。今回のような事故では、全体で状況を把握し、対策をするのが必要であったのに、それができていなかった。

8. 凍傷への対策および今後への反省

本件は、1年生の凍傷という、上級生の責任の下での事故である。また、昨今SAC内外問わず流行している、テムレスおよびそれに準ずるゴム手袋の性能への再認識が必要である。

まず上級生の責任であるが、第7項で述べたとおり、1年生の冬山の経験値は初心者と同様であり、適切な判断力はないのだから、上級生がその場に応じた適切な指示(例えば、風が強いから防風性のあるオーバー手袋に変えるように)を出すことが必要である。そんなところまで、と思われるような細かい項目でも、1年生は気づいていないだろうし、必要な指示である。手袋が濡れていないか、交換しなくて良いか、指先の感覚はあるか、指はきちんと動かしているか、広い稜線ならばピッケルを交互に持ち替えているかなど、上級生にとっては当たり前のことでも、1年生は意識もしていないこともある。1年生自身が気付かなくとも、上級生がしつこいくらいに聞く・注意喚起をすることで、自覚することができるだろう。上級生として、1年生を責任を持って連れていく立場であることを再認識することが必要である。今回は防ぐことのできる事故であった。

次に、テムレスおよびそれに準ずるゴム手袋の性能への再認識である。ゴム手袋は防水であるから、ラッセルなど手袋が濡れてしまうような状況では、オーバー手袋より有用である。しかし、オーバー手袋に比べて、防風性は弱く、風が吹くとすぐに指が冷たくなってしまうという欠点もある。SAC内では、「テムレス最強」と言わんばかりに、どのような状況でも使用する者もいるが、上級生の大半は、自身のこれまでの経験に基づいて、適切に使い分けをしている。しかし1年生にはまだそのような経験はない。上級生が適切に指示を出すことで経験と同じようにして、適切な判断能力が身についていく。上級生自身がゴム手袋の性能を再認識することで、今後本件のような事故はなくせると思う。本件に関連して、上級生16名(会4:5名、会3:5名、会2:6名)に自身の経験に基づくアンケートを実施した。集計結果は別紙「テムレスおよびそれに準ずるゴム手袋の性能評価書」を参照していただきたい。

別紙 テムレスおよびそれに準ずるゴム手袋の性能評価書

五竜岳・遠見尾根における凍傷の事故に関連して、昨今 SAC 内外問わず流行しているテムレス等のゴム手袋の性能に関してアンケート(全 8 問)を実施した。対象は SAC リーダー会員 16 人(会 4: 5 人, 会 3: 5 人, 会 2: 6 人)であった。アンケート結果を以下にまとめる。なお今回の性能評価にあたり、製品について簡単に説明する。テムレスとは、ショーワグローブが発売しているゴム手袋の商品名であり、裏起毛のついた「防寒テムレス」と、裏起毛の無い「テムレス」に大分される。どちらもゴム手袋としての性能は大差ないようであり、SAC 内では個人の嗜好によりどちらも使用する者がいる。その他のゴム手袋であっても、テムレスよりも価格が安いことなどから、オーバー手袋の代替として使用する者もみられる。以下、テムレスおよびそれに準ずるゴム手袋のことを「ゴム手袋」とする。

Q 1. ゴム手袋を使用したことがあるか、なければ使用しない理由。

○使用したことがある → 14 人

○使用したことがない → 1 人

※ほとんど使用しない → 1 人

このように、SAC リーダー会員のほとんどが使用している。使用しない理由としては、袖が締まらないから、中が濡れると乾きにくいからという点、また、ほとんど使用しない理由としては、操作性が悪いから、という点が挙げられた。

テムレス以外にも、ワークマン等のゴム手袋を使用している者もいた。選定する際に気をつけていることとしては、厚手の手袋でも入るように大きめのサイズで手首までであること、岩や木を掴んでも破れないように対突性のあるものであることなどが挙げられた。2 種類の手袋を状況に応じて使い分けている者もいた。

Q 2. ゴム手袋を使用している際、凍傷になった or なりかけたことがある。あればその具体的な状況。

○凍傷になった or なりかけたことがある → 4 人

○凍傷になった or なりかけたことはない → 12 人

SAC リーダー部員の 4 分の 1 にあたる 4 人が凍傷になった or なりかけたことがあると回答した。以下はその時の具体的な状況を回答してもらったものである。

・吹雪のなか歩いて気づいたら指 5 本の先が水膨れでパンパンになっていた。

・防寒テムレス+厚手(ウール)を着用していた場合でも風の強い稜線や岩や雪に手を触れる岩場などで指先に痛みを感じたことがある。

・2015 年 12 月 26 日から同 31 日までの冬合宿南岳西尾根山行にて凍傷まではいかないが指先が痛く固くなった。場所は、南岳西尾根上 2300m 付近まだ木々もまばらに立ちその時はほとんど無風だった。その時手に着けていたのは、薄手のインナーグローブにゴム手袋の 2 枚重ねだった。指先が冷えた要因は、血流不振だと思う。ゴム手袋は登山用オーバ

ーグローブに比べタイトなものが多い。この締め付けが原因で血流不振が引き起こされた。

・雪壁をのっこすところで1日に数えきれないほどずりおちて、裾から雪が侵入し、それがもとで凍傷の初期段階の症状が起きた。その後何も処置せぬまま 7 日間南アの稜線を歩き続けたため重度の凍傷になった。

手を使う深いラッセル時などは、オーバー手袋もゴム手袋も大差ない。しかしオーバー手袋に比べ、ゴム手袋は防風性が低いため、吹雪や稜線の強い風のなかでは凍傷になる可能性がある。また、サイズが小さいための血行不良や、袖が絞れないことによる雪の侵入による凍傷も、ゴム手袋における凍傷の典型的な例であろう。ゴム手袋の特性をよく理解していないと、凍傷になってしまう危険性がある。また、今回の事故もそうであるが、裏起毛タイプの手袋の場合は、防寒であるからといって中にインナー等を着用せずに使用すると凍傷になる危険性が非常に高い。

Q 3. ゴム手袋を使用する際に気をつけていること

- ・乾いたインナー手袋と併用すること
- ・保温性が低いのでインナー手袋と組み合わせて使う
 - ・なるべく内側も乾かす
- ・袖から雪が入らないようにする(ヤッケの裾を隙間なく止める等)
- ・セルフがないため交換の際の紛失
- ・尖ったものに弱いのでクライミング時の破れチェック
- ・ゴムの種類によって雪が着くと非常に滑りやすくなってしまうものがある。懸垂下降時など危険であるので、下界や立岩で試してから山で使用する
 - ・標高が低くて、ロープを使用しない場所で使用
 - ・蒸れにくいと宣伝されているが、汗をかけば当然蒸れるため使い分けや着脱に留意する
 - ・稜線のように強い寒さ・風が予想される場所では必ず下に厚手手袋を着用する、もしくは上にオーバー手袋を着用する
 - ・厚手手袋の上からでも着けられるようにまた、血行不良とならないようサイズに余裕をもたせる
- ・内側が起毛素材のゴム手袋は使わない。一度中が濡れてしまうと乾きづらいから
- ・低温対応のものを選ぶ。非対応のものを山に持って行って硬化させた経験がある
- ・冷たさを感じたら、インナーを暖かいものにしたリオーバー手袋をつける
- ・雪が深いときはオーバーグローブをする

※太字は複数人が回答した

上のような回答となった。個々人で様々な点に留意して使用しているようであるが、共通しているのは、乾いたインナーを使用すること、雪の侵入を防ぐこと、場所・濡れ具合によって着用するものを変えるなど、いかに指が冷たくならないようにするかという点であ

った。また、着用する際に気を付けていることは特になくという回答もあった。

Q 4. ゴム手袋のメリット、デメリット

《メリット》

- ・防水(濡れづらいので湿った雪にも強い)で、耐風性にも優れる
- ・オーバー手袋に比べて耐久性がある
- ・値段が安いので予備も持てる
- ・五本指であること、素材の性質もあってか操作性が高い
- ・脱着が簡単であり、熱を外に逃がしにくい
- ・フリクション性が高い
- ・防寒タイプの場合、一体型であるためつけるのが楽
- ・テムレスは他製品に比べて蒸れにくい
- ・サイズがいろいろある

※太字は複数人が回答した

《デメリット》

- ・防寒テムレスは、一度中が濡れると乾かすのが難しい
- ・オーバー手袋に比べて耐風性、保温性が低い
- ・袖が絞れず短いため、雪が入りやすい
- ・汗をかけば当然蒸れる
- ・セルフを付けにくい
- ・操作性が悪い
 - ・表面に薄い氷の膜ができ滑る
 - ・耐熱性が不安である
- ・大きめのものを使用してもサイズが小さく、血流不振を引き起こす
 - ・摩擦、刺激に弱くすぐに穴が開く
 - ・懸垂などの際にザイルの滑りが悪い

※太字は複数人が回答した

Q 5. オーバー手袋のメリット、デメリット

《メリット》

- ・乾いた状態であれば耐風性、保温性が高い
- ・袖が長く絞れるため、雪が入りにくい
- ・セルフが着けられ、手のひらの滑り止めなど工夫がされている
- ・ゴアテックスであり、インナーを取り外せるため、乾かしやすい
- ・保温性や操作性を考慮し、3本指・5本指を選択できる
- ・操作性が良い

- ・血流が悪くならない
 - ・様々なインナー手袋と合わせることができる
 - ・ゴム手袋と比べると懸垂などがしやすい
- ※太字は複数人が回答した

《デメリット》

- ・耐久性が低く、すぐに破れてしまう。特に懸垂下降に弱い印象
 - ・ゴム手袋に比べ高価である
 - ・湿雪やラッセルが深いところだと濡れてしまう(防水性が低い)、さらに凍ってしまう
 - ・余りの部分が邪魔をし、細かい操作をしづらいことがある
 - ・耐風性でゴム手に劣る
 - ・脱着が面倒である
 - ・蒸れやすい
 - ・薄いのでピッケルを持つときなど冷たい
- ※太字は複数人が回答した

Q6. どのような状況で使い分けしているか(雪質、雪の量、標高、天候等)

本質問の意図は、ゴム手袋とオーバー手袋をどのような状況で使い分けしているかどうかを知るためであったが、回答の中には、オーバー手袋は使用せず、ゴム手袋のみを使用し行動するといった回答もあった。以下に分けて記載する。

【ゴム手袋とオーバー手袋の使い分け】(9人が実施していると回答)

○ゴム手袋

- ・ラッセルがあるとき(ないとき)
- ・入山日や水気の多い雪が出てくる残雪期、気温の高い日
- ・暖かい、風がない、雪が少ないとき
- ・樹林帯や標高が低いとき
- ・水づくりや用足しの際

○オーバー手袋

- ・森林限界を超える標高や主稜線など風が強くなることが予想される日
- ・ロープを使う予定の日
- ・朝晩の気温が低くなるため、樹林帯であっても2日目以降はオーバー手袋を使用
- ・吹雪、強風、悪天の下での長時間行動が予想される場合

湿雪のラッセルがあり手袋が濡れる恐れのある際は、ゴム手袋を使用するという意見が多かった。また、雪の量が多い場合にはオーバー手袋を着用するという回答もみられた。基本的には天候が悪くない場合もしくは気温がそんなに下がらない場合(標高の低い場所、天候の安定している日)に使用していると感じられた。また、下部のラッセルでテムレスを

使用することで、稜線上などで乾いたオーバー手袋を使用することができるという回答もあった。

オーバー手袋は、比較的シビアなコンディション(森林限界以上や、風の強い稜線、悪天候時等)で使用しているとの回答がほとんどだった。特に、稜線上はオーバー手袋を着用するとの回答が多かった。また、ロープを使うなどして、長時間立ち止まって作業することが予想される日には、保温性を重視してオーバー手袋を着用するとの意見もあった。

【使い分けはしていない／基本はゴム手袋】(7人が回答)

常時オーバー手袋で行動しているという人が1人であったほかは、基本的にはゴム手袋で行動する、もしくはオーバー手袋は使わないという回答であった。

基本的にはゴム手袋を使用するという人は、基本的にはインナー手袋の厚さを変更したり、外側のゴム手袋の厚さを変更したりしている。森林限界までの樹林帯では薄手のゴム手袋に薄手のインナー、風の強いと予想される稜線や手を使うラッセルでは、中を厚手手袋に変更する、といった風なのである。また、ゴム手袋が濡れてしまった場合に備え、オーバー手袋も持っているという回答もあった。

オーバー手袋は使わないと回答した者は、基本的にどのような状況であってもゴム手袋を使用している。

Q7. 1年生にゴム手袋を使わせることについてどう思うか。また、どのようなことに気をつけているか

基本的に、冬山が初めてである1年生にゴム手袋を使用させることは、上級生の適切な指導の下使用するのであれば問題ないという意見がほとんどであった。1年生は状況に応じて的確に使い分けることが、経験が浅いため困難であり、上級生と同じタイミングで付け外しさせたり、上級生が天候等を考慮して1年生に付け替えを指示したりすることが大切であるとの意見が多かった。また、1年生にゴム手袋、オーバー手袋双方の特性をきちんと理解したうえで使わせるのであれば問題ないという意見もあった。

本年度の1年生は、プレ冬合宿からゴム手袋が冬山のスタンダードであるかのように教えてしまったため、オーバー手袋を使う機会が少なかった。基本であるオーバー手袋の特性をよく理解させたうえで、ゴム手袋を使わせるべきだという意見もあった。

また、ゴム手袋の1枚使用の禁止や、防寒テムレスであると中が乾かしにくいので、使用禁止にする、破れたものを使用していたりする場合、森林限界より上部での薄手との併用を禁止するなど、ルールを定めたほうがよいという意見もあった。

総じて、森林限界や、風の強い稜線など、シビアなコンディションである場合には、上級生が適切に脱着を指示するのであれば、1年生の使用は認められるであろう。いずれにせよ、会の中でルールを設定し、上級生がきちんとゴム手袋・オーバー手袋の特性を把握していれば問題ないであろう。

Q8. その他(自由記述)

自由記述であるため、要約は控え、以下に掲載する(原文を一部改変しています)。

2点あって、1つはヤッケとの相性でどうしてもゴム手を使ってはいけない人がいること。これは上でも書いたけど、袖が細すぎるとか、マジックテープが壊れてるとかでゴム手の袖が外にでてしまう人はゴム手を使ってはいけない。これはゴム手側に何か加工をすればいいのかもしれないけど、いいのが思いつかない。

もう一つはVBLというよさげなシステムがあること。簡単に説明すると、一番肌に近いところでムレムレにさせれば手袋濡れないやんってことで。要するに一番下に薄いナイロン手袋とかゴム手袋とかをしてその上にインナー手袋とゴム手袋をすれば、蒸れで手袋は濡れなくなるし、完全防水でハッピーかもってこと。やったことないからこれも実験が必要だけど、一部の人の間では流行ってるらしいです。

ゴム手はオーバー手に比べ速乾性は低い。行動中は気にならないが、テントに入り脱いでみると意外と湿っていたということは多々ある。薄手や厚手手袋越しでは少しの濡れには気づきにくいですが、防寒テムレス1枚だけではもろに影響されると考えられる。今回の稲垣の事故もそういったことが少なくともあるんじゃないかな。

ゴム手袋でもオーバー手でも凍傷なるまでの段階で冷たいなど何か感じるものがあると思う。その感覚は個人の問題で上級生は注意喚起することしかできないので、各自リスクを考えて行動すべき。

テムレスは濡れに強く、動かしやすいし、温度調整もしやすいので便利だが、しっかりした手袋とオーバーグローブを1組は持つべき。

正直なところ自分は体質的に凍傷になりにくいのでどこでもテムレスを使ってしまいがちだが、なりやすい人は簡単に凍傷になっているイメージがある。その点未知数の1年生のテムレスの使用はやはり慎重に見極める必要がある。1年生は多かれ少なかれ上級生の真似ををすると思うので、自分が大丈夫だと思っても1年生には同じように使わせないくらいの慎重さ、強制力をもって山行に臨むべきだと思う。また1年生の自己流・自己判断は最も早く冬合宿明けか春休み山行からにさせるべきだと思う(そのやり方で大丈夫か上級生のチェックを入れる)。

仙涯嶺東尾根滑落事故報告書

CLのことば

今回の事故は、油断がまねいたものです。山での油断は、死に直結します。今回、崖の上で止まり、出血もなく、意識もはっきりしていたのは不幸中の幸いです。死ななくて良かった、生きていて良かったというのが率直な感想です。ヘリで出動していただいた消防をはじめ、警察やOB、学務や家族など関係者の方々にはご迷惑とご心配をおかけして大変申し訳ありません。個人はもちろん、会としてこの経験と反省を共有して今後はさらに慎重な登山活動を行っていきたいと思います。

4年荒川武大

目次

CLより・・・1

計画の概要・・・2

行動記録・・・2

概念図・・・4

事故後の行動・・・6

事故原因の分析と対策・・・10

事故後の行動に対する反省と対策・・・11

事故者の言葉・・・13

山行計画の概要

期間：2016年2月15日～2月20日(実働4+予備2)

場所：中央アルプス 仙涯嶺東尾根～空木岳

メンバー：片野亜紀(会4)、小林滉平(会4)、
大槻泰彦(会2)、渡部優(会2)、稲垣翔(会1)

現役留守：城田曜子(会2)

行動記録

2月15日

6:00	ゲート前出発
9:00	林道終了 東尾根取りつき
10:30	1660m 付近
15:00	2150m 付近にて T.S.

2月16日

5:50	2150m 付近 T.S.発
8:00	15m 断壁基部 小林リードで試みるも、他メンバーの実力的に厳しいと予想し、敗退。
9:00	15m 断壁から少し右に巻いたあたりから小林リードで登攀開始
15:00	登攀終了（全員）
17:00	更に2ピッチ FIXを張ったのち、良いテント場が見つからないため、FIXと懸垂下降を使い引き返しはじめる。
18:00	2350m 付近に T.S.

事故当日 2月17日

6:30	2350m 付近テント場発
7:30	片野滑落
8:00	小林、片野滑落現場到着
9:40	片野、小林滑落地点に引き上げ終了
12:00	2350m 付近テント場着 テント設営後、大槻、稲垣、渡部の3人はザックをとりに引き返す
12:30	現役留守の城田、OB留守の佐藤の順に電話
13:30	OB留守佐藤さんから再度電話があり、警察署への連絡をしてもらう
14:30	・片野がメーリングリストによって会員全員に事故を伝える ・駒ヶ根警察署から電話でピックアップの段取りなどの指導をうける ・大槻、渡部、稲垣の3人がテント設営地に到着
17:00	駒ヶ根警察署から電話でピックアップ時の注意事項などの指導を受ける
18:30	駒ヶ根警察署から確認の電話を受ける

事故翌日 2月18日(片野)

6:30	駒ヶ根警察署、消防から電話を受ける
6:55	へり到着

7:00	片野ピックアップ
7:15	片野病院着

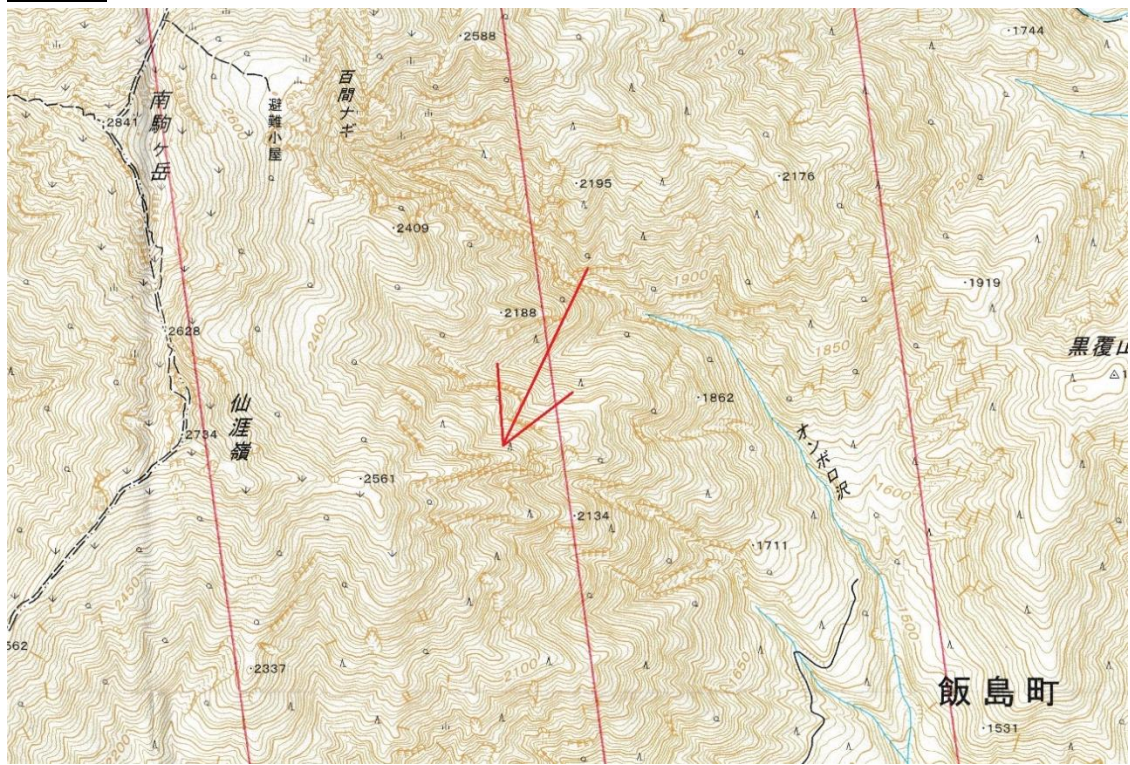
2月18日(片野以外のメンバー)

6:00	小林、大槻で15m岩壁正面からの懸垂下降準備
6:20	渡部、稲垣でテント撤収開始
6:50	懸垂準備、テント撤収後全員集合 片野のピックアップを見送る
7:30	出発
9:20	2270m付近(懸垂3P、FIX1Pあり) その後支尾根に迷い込む
11:30	2270m付近に戻る FIX(2P)を用い下降
15:00	2175mの大岩下部にてテント設営

2月19日(片野以外のメンバー)

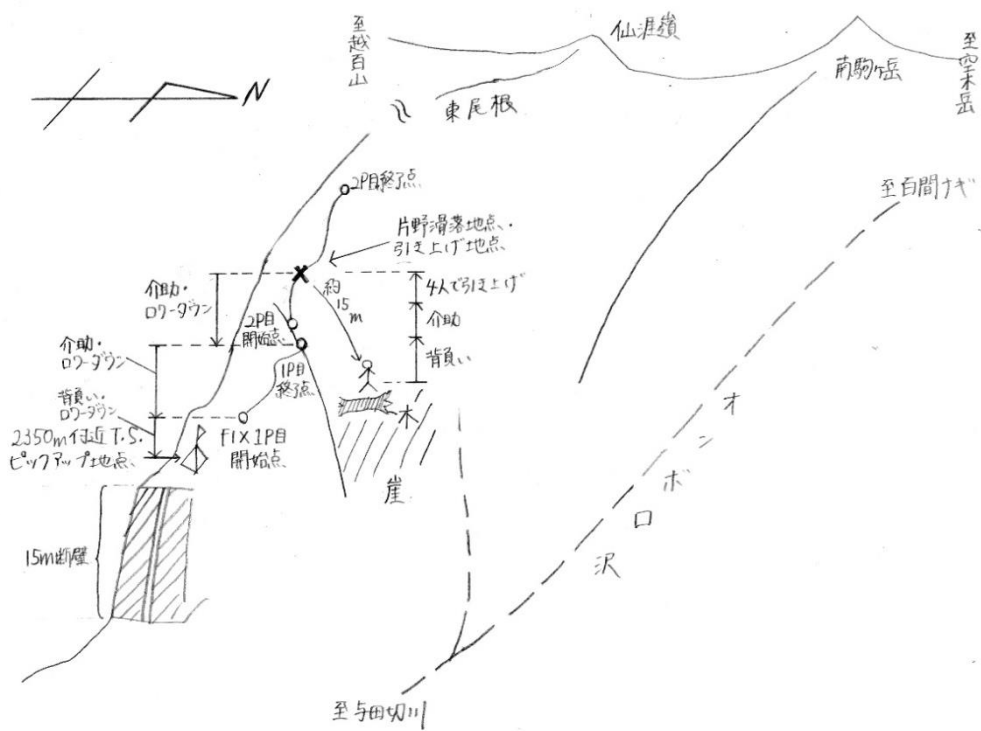
6:00	出発
8:20	1850m付近
9:25	1660m付近 笹藪斜面終了
10:20	林道
11:45	発電所付近
12:25	ゲート着 下山
12:50	下山報告(電波不安定のため車で千人塚公園に移動)

地形図



国土地理院 1/25,000 地形図 空木岳

事故の概略図



写真

滑落地点から上部



滑落斜面



事故当時の現場の様子

冬型に伴い、雪のふる天気であった。朝の時点で新雪が表層に積もっている不安定な積雪状態であった。また、急斜面でありロープをだしながらの行動となった。雪は少なく、アイゼンとピッケルを使用しての行動であった。

事故の概要

6:30 に出発し、前日引き返した際に懸垂下降したロープを補助にし、順番に通過。そのときの順番は、大槻、片野、稲垣、渡部、小林。その後、前日にすでに張ってあった FIX を大槻、稲垣、片野の順で出発し、渡部と小林は 1 ピッチ目のロープの回収を行う。大槻、稲垣が FIX を通過中、片野が 2 人の通過を待っている際、足場が崩れ、バランスを崩し、15m ほど滑落。その際、FIX に片野はセルフをとっておらず、手で掴んでいるのみであった。滑落停止後左足の靴の紛失を確認する。小林が懸垂下降で片野と合流。片野の左足が動かないことを確認し、渡部に引き上げの準備を指示。小林が片野を背負い、上がり始める。かなり急こう配であることと重さにより、思うように引き上げが行えないので、背負いを解除する。背負いから介助に変更し、片野が小林に介助され引き上げてもらう。どうしても越えられない箇所があったため、小林も片野を残し上部の渡部等と合流し、4人で尾根上に引き上げる。ヘリでのピックアップを考慮し

前日のテント場に戻ることを決定する。大槻が片野を介助しローダウン(2P)で降ろす。全員集合の後、大槻と稲垣が先行しテント場に行き、小林が片野を背負い、ローダウン(1P)でテント場まで降りる。テント設営後、片野を収容。その後大槻、渡部、稲垣の3人が現場に戻りザックの回収やロープの回収を行う。片野と小林は、現役留守の城田とOB留守の佐藤さんに電話をかける。

事故後の片野の容態

転がり落ちた際、左足を立木に強打し、その結果、膝を負傷し、自力歩行が困難になった。左足以外は損傷なし。意識もはっきりしていた。2月19日現在の医師の診断では、頸骨頰間隆起骨折と診断され、それに加え膝蓋腱損傷、後十字靭帯損傷の疑いと診断された。入院・手術は必要なく、全治2か月の怪我であった。

事故後の行動

滑落直後から小林合流までの片野の行動

足場が崩れ、転がるようにして谷方向に滑落。15mほど滑落し、立木にあたり停止する。すぐに上部の大槻から「大丈夫ですか？」と問いがあり、片野もすぐに「大丈夫」と応答。はじめは痛みを感じず、左足の靴を紛失しただけだと思ったので、小林に靴の捜索を依頼する。徐々に痛みを感じ、膝が曲がらず自力脱出が不可能と判断し、小林を自分の場所まで呼び、その場に待機する。

滑落直後からの他メンバーの行動（主に小林視点）

【滑落～合流】

片野滑落を稲垣が目撃。稲垣が先頭の大槻に報告して2人で安否を確認。後ろで渡部と小林は1ピッチ目のザイルをたたんでおり、滑落には気づかず。片野から小林に『滑落して靴が落ちたから取りに来て』と声がかかり発覚。ザイル回収を渡部に託し、片野の滑落部まで登り、上から片野を確認。返事もしっかりしており、この時点では靴さえ回収すれば行動続行可能と判断しており、上部の大槻、稲垣を2ピッチ目の終了点まで登り待機指示を出す。小林が渡部からザイルを受け取り、支点を固定し懸垂下降で片野と合流。外傷は見られず、左足は靴下のみになっていた。靴は見当たらず『骨折しているかも』と聞かされ、この時点でヘリレスキューを判断。上部の2人にFIXを使って戻らせるのと、渡部にザックを空にさせて懸垂ロープ伝いに流し渡すように指示を出す。片野のザックはザイルと繋げて一時デポしておく。

【～引き上げ完了】

空ザックで小林が片野を背負い、固定してあるロープをマッシャーで登り返そうとするが、傾斜がきつく難しかった。そのため渡部に1/3引き上げシステムの構築を依頼。稲垣と大槻の合流を待ち、ロープで片野、小林を繋げ、ザックで背負い引き上げてもら

いながら尾根上を目指した。この時 1/3 システムが伝わっておらず、実際は半マストで行っていたが小林は気づかず登る。半分ほど登ると傾斜が強くなり、片野も歩けると言うので背負いを解除し、小林が前で足場を掘り、手を引っ張りながら登る。残り 5m 程のところ壁になり、この時点で引き上げの弱さから上部の 3 人にシステムの確認をして、1/3 システムではないことを認識。作り直させる指示を出し、完成を待つ。システム構築に時間がかかり片野は左足の凍傷を気にかけていた。最終的に小林が 1 人で上まで登り、構築を完成させ 4 人で引き上げる。すぐツェルトで包み、予め稲垣に準備するように指示していた予備靴下に履き替えテントシューズを履かせた。その後、大槻にザック回収（渡部が確保）を依頼。その間に小林が 2 ピッチ目の FIX 回収を行った。

【～テント設営】

小林が FIX ロープ回収後、そのロープで 1P 目の終了点から開始点まで FIX を張り、残ったロープでローダウンさせる準備を 1 人で行う。この間にザック回収が終わり、使用していたロープで大槻と片野をつなぎ介助しながらローダウンで引き上げ地点から 1 ピッチ終了点まで下降。続けて FIX にセルフをつけながら 1 ピッチ目の開始点まで下降。大槻と片野はその場で待機させ、渡部がテントや火器を詰めた片野のザックを担ぎながら懸垂下降、稲垣は空のザックを担いでローダウン、小林がロープと自分のザックを持ち懸垂下降という順番で全員が合流。その後片野から介助より背負いの方が楽と聞き、小林がザックで背負いの準備をし、その間に大槻と稲垣が(片野と小林の)ザックと共に先にテント場に戻り、設営を始めさせる。小林と片野がテント場まで下降し設営終了後、片野を小林と共にテント内へ収容。大槻と稲垣は渡部と合流させ、上部にデポした自分たちのザックと FIX ロープの回収を依頼した。テント内では火器で暖をとりながら、現役留守の城田、OB 留守の佐藤への電話、メーリングリストの順で状況を伝える。その後片野の足を視診し外傷はないが左足が大きく腫れているのを確認。また足先に凍傷の疑いがあったため、規格袋に湯を入れ保温も行った。テント場から上部の 3 人とは声が届く距離であり、時々状況を確認しながら待機し、全てを回収し合流した。

留守本部の行動

2月17日	事故当日
12:32	一報 片野→OB 留守佐藤 事故概要の説明、怪我の状況の確認 全員の携帯電話をあけておくように指示
12:41	OB 留守佐藤→現役部員の荒川、塩谷に電話 動ける人は BOX 集合
12:46	佐藤→OB 小平に電話 BOX 集合を伝える
13:29	BOX で佐藤、小平合流

	→片野に電話 怪我の状態を聞く 駒ヶ根警察署に計画書の提出がない
13:33	佐藤→駒ヶ根警察署に電話 担当：江川さん 状況を伝える 救助要請を行う 加藤了から駒ヶ根警察署に FAX で計画書を提出
14:21	駒ヶ根警察署→佐藤に電話 計画書を確認してもらい、2月18日の朝へのピックアップを予定
15:02	佐藤→駒ヶ根警察署に電話 伊那中央病院に搬送予定 消防のヘリ“アルプス”が動くことを確認
15:11	佐藤→片野の実家に電話(祖母がでる) 事故の報告
15:16	佐藤→片野父に電話 事故の報告、怪我の状況、救助方法の報告
15:30	片野父→佐藤に電話 事故の詳細を報告 翌日の救助予定等を連絡
15:39	佐藤→学士山岳会の藤松さんに電話 事故報告、現状を連絡
15:55	佐藤→学務に連絡、会って話す
16:19	小平→加藤了 現在の状況と救助の様子を連絡
16:24	小平→荒川 現在の状況と救助の様子を連絡
17:28	佐藤→小平 警察から連絡があり2月18日の6:50に救助し伊那中央病院に搬送が決定 保険書類の準備
17:30	小平→片野父 2月18日の6:50に救助し伊那中央病院に搬送が決定を伝える
17:48	片野→小平 小林たちの下山が明後日になるかもしれないことを伝える
17:43	小平→城田 保険書類を準備するように伝える
18:54	駒ヶ根警察署→小平 2月18日6:30にヘリが松本をでる 6:50ピックアップ、伊那中央病院に搬送、伊那消防署が救急車を出すことを確

	認
21:00	農学部顧問小林元→小平に電話 事故があったかのと合わせがある(学務からの連絡) 事故概要の報告
21:03	小平→学士山岳会員古賀に電話 状況報告 学士山岳会には藤松さんに電話したことを伝える 学士山岳会は特に動くことがない旨を伝える
2月18日	事故翌日
7:15	へり病院到着 片野両親も病院に到着、小平と合流
7:20	診察開始 レントゲン、CT、MRIなどの検査を行う
8:40	城田→小平 片野以外の登山メンバー4人の留守は城田が続行 片野関係は加藤了を中心に連絡する旨を伝える
9:50	農学部顧問小林先生が病院に来る 片野本人と両親に会って話す
12:10	診断結果確定 手術や入院の必要なし、一週間後に再検査
13:10	伊那消防署へお礼
2月19日	
12:50	残留4人下山報告
	小平、荒川、長野県航空隊にお礼
	小平、荒川、小林、大槻、渡部、稲垣、駒ヶ根警察署にお礼

ピックアップ時の指導

今回、へりレスキューにあたり、警察や消防の方々からピックアップ時の指導を受けた。ここに記しておく。

- ・明るい色で、目立つ色の服を一番上の羽織る(黒や白などはNG)。今回は、ショッキングピンクのダウンを一番上に羽織った。
- ・ヘルメットを装着すること。
- ・テントは撤収し、飛ばされるものは身に着けないこと(眼鏡やサングラス等)。
- ・へりを確認したら、ツェルトやテントシートを振り、アピールすること。また、ヘッドライトを点灯させ、へりに向けること。

事故原因の分析と対策

- ・事故の原因

技術面

まず FIX が張ってあるにも関わらず、それにセルフをとらず手でつかんでいるだけであった。基本的な事項であることを怠り、事故につながった。

また、FIX 通過を待っている間に足の不安定さを確認しておらず、結果立っていたスタンスが崩れ、その崩れに対応できずバランスを崩し、さらに持っていた FIX を離してしまったことが原因である。

精神面

会 4 だから、という油断が FIX にセルフをとらなくて大丈夫という精神状態にしていた。前日にノーロープで片野自身が偵察に行っていたところであり、1 年生がいるし、一応張っておこうという FIX の位置づけであったため、素早く通過したいという一心でそのひと手間を惜しんでいた。自分自身の実力を見誤ったために起こった事故である。片野自身、他の部員に比べ体力的にも歩行技術的にもかなり劣るにも関わらず、“このくらいなら”という気持ちが今回の事故を引き起こした。

- ・今後の対策

油断が今回の事故を引き起こした。FIX にセルフをとる、待っている間はきちんとキックステップで踏み固める。このような初歩的な動作を怠らないこと、身に着けることが重要である。また、客観的に自分の実力を評価しておらず、まあ大丈夫という気持ちがセルフをとらなくてもいいという勝手な思考停止状態に陥らせた。会員同士で自分たちの実力を客観的に見定めてもらい、登山計画をたてていく必要がある。

事故後の行動に関しての、反省と対策

①片野の損傷部位の未固定

セオリー的には、傷病者を安全な場所に移動した後、怪我の処置を行うことが優先されるが、今回はその処置を行わなかった。膝が痛むとわかっていたのであるなら、サムスプリントや杖等で固定を行うべきであった。優先順位の再確認を会員全員で行い、サムスプリントの使い方や、実際に使ってみるファーストエイドの講習を今年は実施できてない。知識はあるだけでは消化できないので、知識の共有と知識の実践を行う機会を設けるべきである。

②小林の指示系統とコミュニケーション不足

小林は片野と合流後、テント場までの搬送の流れをイメージしていたが、その共有をしておくべきだった。下級生にはその場のみの指示だけで、彼らは流れを理解しないまま作業を行っていた。また、作業が遅れている際、小林本人が怒鳴る事も多くなってしまい下級生に冷静さを失わせていた。下級生の作業が滞っている際、潤滑に進めるには

何ができているのかを1つ1つ確認するべきであった。

その他の反省と対策

①所轄警察への計画書の未提出

今回の山行の所轄警察署は駒ヶ根市と木曾町であったが、計画書は長野県警のHPからの提出しかしていなかった。これにより、駒ヶ根警察署に計画書がない状態であり、結果事故が起こった後、加藤了がFAXで駒ヶ根警察署に提出した。今後山岳会では、長野県警のHPに提出すると同時に各所轄警察署に郵送で送るべきである。また、2016年7月1日から山行計画書の提出の仕方が変わる予定なので、しっかりと確認を行う。また、事故後に迅速に動けるようにBOXに一部印刷したのをしておく。

②山行承認

今回の山行は登山体系やネットにもほとんどのっていない情報の極めて少ないルートである。まず、このようなルートで1年生を連れていくべきではなかった。それに加え、小林に依存しているパーティー構成になっていた。核心部以外も小林が先頭にたちルートを構築する場面が多くあった。このルート選択自体がメンバーの実力にそぐわないルートであったのだろう。ネット情報がのっているからといって自分たちもいけるとはもちろん限らない。そこをネットの情報をうのみにして登山計画をたててしまった。

今後は夏や今までに行ったことのない道や情報が極めて少ないルートには1年生を連れていくことは控えるべきであるし、自分たちの実力も会員に客観的に評価してもらい、慎重に承認を行わなければならない。

③救助訓練のシミュレーション不足

山岳会では合同岩トレなどを通じて会員同士で知識の共有に努めている。救急法の講習会なども開き、知識がないわけではない。しかし、訓練でのシミュレーション不足が浮き彫りとなった。リスクマネジメントとして様々な状況に対して柔軟に対応する必要があるがそこでの想像力の使い方を今一度会員と共有し、実践していく必要がある。今年には特にシミュレーションを行う時間を作ることができず、事故の対応の遅れにつながったかもしれない。普段の岩トレでも本当に向上意識を持ってやっているのか、緊張感をもってやっているか、いつもと違う状況に対応できるかなど、マンネリ化の打破が大切になってくるだろう。ロープ技術の部分だけではなく、回数こそが大事であり、会員の一部は経験値が不足している。特に伊那組は1年生と普段岩トレをしない分、緊張感が足りていなかったのかもしれない。たくさんロープに触ること、そこからはじめなければ何もできない。

④農学部顧問への連絡

ここ2年ほど、農学部顧問という位置づけがあいまいになっており、きちんと連絡をしていなかった。山行計画書の提出や挨拶すらまともに行えていない状況であり、そのことが原因で混乱を招いた。今後は各学部におかれる山岳会顧問との連絡をきちんととり、このような遭難の際に混乱が起きないようにする必要がある。

⑤現役留守の機能

今回、OB留守の佐藤さんやOBの小平さんが迅速に対応してくれたため、かなり早い段階で警察との連絡をとることができた。しかし、マニュアル的には現役留守が警察や保護者に連絡することになっている。今回の場合は、偶然にも佐藤さん小平さんが対応してくれていたが、そうでない場合もある。その場合、現役留守が他の残留部員に迅速に連絡し、松本に集合する必要がある。残留部員が今どこにいて、動ける状況かどうかを確認する必要がある。そうでない場合も、メーリングリスト等を活用し、残留部員は自分がどこにいて動ける状況かどうかを一方的にでもいいので流すことができれば、現役留守もスムーズに動くことができるだろう。

収支報告

小平OB ガソリン代(松本伊那間往復等)…3000円

お礼菓子折り代…2332円

合計 5332円

事故者のことば

4年片野亜紀

今回、滑落、さらにヘリレスキューという大きな事故を起こしてしまいました。佐藤OBや小平OBをはじめとするOBの方々、駒ヶ根警察署や消防の方々、病院関係者の方々、山行をともにした小林、大槻、渡部、稲垣、またリーダーの荒川をはじめとする山岳会の仲間にも多大な心配と迷惑をかけてしまいました。本当に申し訳ありません。すべては自分の未熟さと過信が招いた事故にあるにも関わらず、多くの方の尽力を賜りました。感謝しきれません。自分自身、命に別状はなく左足の怪我さえ治れば社会に復帰することができます。ここで助けていただいた命をどう山岳会に、社会に還元していくかが自分の役割とっております。このような事故を二度と起こさないためにこの報告書とともに自身の記憶に克明に刻んでいきます。